

十二月三日、昨日、馬匹揚陸終了。

出港用意完了、驅逐艦四、掃海艇一、入港。

十二月四日、十九時三〇分母島出航。

十二月六日、護送船團「グアム」<sup>GUAM</sup>ニ向ケ出港

明石大尉。各班指揮官ニ命令ガ發令サレタ。

十二月七日、サイパン北方ニテ一三〇〇時ラヂ  
オノ吉報ニ狂喜シタ。「布哇」ト「比島」ニ於  
ケル戰鬥ハ上首尾デアツタ。我々ノ目標タル「  
グアム」ハ燃燵サレタ。

(「D.H.H」時事翻譯第十二號十一頁)

佛印派遣軍第一〇六陸上勤務中隊ノ「イモト・  
グンベイ」所有ノ日記ニハ左記ノ事項ガ書カレ  
テアル。

一九四一年十一月一日、一〇六〇時西貢ニ到着

十一月二十七日、一四〇〇時頃西貢出航

十一月二十八日、航行中

十一月三十日、大海丸ニテ航行中

十二月一日、午前海南島ニ安着

十二月二日、引續キ海南ニ碇泊

十二月三日、一六〇〇迄大海丸ニ留リ

「カシイ」丸ニ移乗ソノ夜ハ船ニテ明カス。

Doc 1628

十二月四日 一〇六〇〇時目的地ニ向ツテ出航  
十二月七日 一四〇〇時「シンゴウラ」ニ安着  
十二月八日 一〇三〇〇時敵前上陸準備〇六〇  
〇時頃敵前上陸決行、完全ニ敵ヲ奇襲セリ。

(聯合軍機譯通譯時事譯第五七號八頁)

第一四四步兵隊ノ「イマシロ・ツルマ」

所有ノ日記ニハ左記ノ事項ガ書カレテアル。

一九四一年十月七日 一西部三四部隊ニ召集サル。

十一月二十三日 一「チェリオン」丸ニテ坂出  
出航。

十一月二十七日 一小笠原諸島母島着。

十二月四日 一母島出航。

十二月十日 一敵前上陸ニ依リ「ダラム」  
占領(聯合軍機譯通譯部時

事譯第四八號一六頁)

所屬部隊不明ノコシモト。シヨウサブロウ」所  
有ノ日記ニハ左記ノ事項ガ書カレテアル。

一九四一年十一月二十三日 一〇二〇〇ニ兵營發

二十三 日 一三〇〇時ニ「チェリボン」丸ニ乗船

一四〇〇過キ、坂出港出航南下ス海ノ外何モ見

エズ。三日間航海後四日ノ朝島ヲ見タ懷シイ母

106

此テアル此ノ島デ人馬ヲ擡陸シタ。一週間ノ滞在  
 在テ元氣ヲ充實シタ。十二月四日ニ再ビ乗船シ  
 此ノ島ヲ後ニシタ。再ビ船中生活ガ始マツタ。  
 南下スルニツレテ段々暑クナツタ。  
 十二月九日一ニ〇〇〇時ニ終ニ我々ノ義務ヲ遂  
 行スル時ガ來タ。

十二月十日一〇二〇〇上陸開始、船ニ或ル事情  
 ガアツタ爲我々ガ上陸シタノハ一一〇〇頃デア  
 ツタ。

(A T I S 捕獲番類第八七號一頁)  
 ノ南海派遣軍ノ「佐藤チトシ」所有ノ日記ニハ  
 左記ノ事項ガ書カレアル。

- 一九四一年十一月十四日一釜山ニ向ツテ出發
- 十一月十五日一汽車デ南下
- 十一月十六日一尙 車中
- 十一月十七日一京城ニ接近ス
- 十一月十八日一砲ヲ船ニ積載、釜山港出航
- 十一月二十日一〇七〇〇時門司港入港
- 宇品港デ石炭積載、砲兵中隊長並高橋少尉ニ別  
 ル、「松江」ニ砲ヲ積載
- 十一月二十二日一宇品港出航坂出ニ向フ内海  
 ヲ通ツテ

十一月二十三日 夕刻坂出出航  
 十一月二十七日 軍艦卯月ニ護送サル  
 十一月二十八日 小笠原諸島ニ到着  
 十一月二十九日 母島上陸  
 十一月三十日 母島ニテ「バナナ」「椰子ノ實」  
 「パイヤ」ヲ採取  
 十二月四日 〇九〇〇時、小笠原出航  
 十二月十日 今朝 〇一〇〇時 歩兵「グアム」ニ  
 敵前上陸

(聯合軍機譯通譯部時事機譯第七四號三二頁)  
 第一四四歩兵聯隊ノ某隊員所有ノ手帳ニハ左記ノ  
 事項ガ書カレテアル

一九四一年十月五日 一三〇〇西部三四部隊「ウ  
 エムラ」機ニ入ル  
 十一月二十三日 一八〇八時 兵營出發、午後「  
 チェリボン」丸(四〇〇噸)ニ坂出港ヨリ乗船  
 十一月二十七日 小笠原母島ニテ停泊  
 十一月二十八日 母島ニ上陸行軍  
 十二月四日 〇九〇〇時 母島出航  
 十二月八日 〇八〇〇時 一「チェリボン」丸船上ニ  
 テ日本ハ合衆國、英國並和露ニ對シ宣戰ヲ布告セ  
 ル旨ヲ聞イタ。

Doc 1628

十二月十四日「海ガ荒レテキルノニモ拘ラズ、計畫通り「グアム」ニ上陸決行。

(聯合軍翻譯通譯部時事翻譯第一〇號二一頁)  
基隆港「モントレサル」丸ニ於ケル一九四一年十二月四日附第四八對空大隊作戰命令A1-16號ハ多分「ルソン」ト推定サレル來ルベキ上陸作戰中ノ對空防禦ニ關シ左記ノ訓令ヲ公布シタ。

- 一、大隊ハ別紙ノ計畫ニ基キ戰闘スベシ
- 二、全軍敵偵察機ヲ墜スベシ
- 三、各隊ハ直ニ死角並射界ヲ報告スベシ

#### 陸軍防禦空隊戰闘計畫

#### 一、計畫

防空隊ハ常時航空機並潜水艦ヲ射撃ナシ得ルモノトス、機先ヲ制シ、艦船ノ防護ヲ直接支授スベシ、且海軍並空軍ニ協カスベシ。△  
魚雷攻撃時ハ努メテ航空機ヲ墜スベシ。

#### 二、要領

(1) 強力ナル防空火點ヲ設置スベシ、艦船ヨリ出來得ル限り遠クニテ敵航空機ヲ墜スル

109

ニ全カヲ盡スベシ戰闘計畫別紙ニ記載。

(ロ) 上陸地點ニ於ケル空襲ニ備ヘ碇泊地防禦ニ對シ強カナル火點ヲ設置スベシ。且第一線作戰ニ協力シ、尙戰略的要點防禦ニ參加スベシ。

(ハ) 第一次上陸後出來ルダケ速カニ次ノ隊ヲ上陸セシムルベシ

四八 A A



尙海岸ヨリ碇泊地ヲ防禦シ大隊上陸ヲ完了シ戰略的要點ヲ防禦スベシ位置ノ詳細ハ上陸時ニ依ルモノトス。

(ニ) 第一線ノ一部ノ作戰ノ進捗ノ爲事情ニ應ジテ部隊ハ如何ナル戰略要點ヘモ配置サレルベシ。

(ホ) 集合地點ニ於ケル防空ハ船團ニ依リ實施セラレ。

(聯合軍翻譯通譯部敵側出版物第二號八一〇頁)

Doc 1628

二十三、一九四一年十二月五日

第一〇六陸上勤務中隊ノ「カワノ・ススム」  
所有ノ日記ニハ左記ノ事項ガ書カレテアル。  
九月二十三日「訓練、應召者總員ニ對シ檢閲  
〇七〇〇時ヨリ面會者兵營地區ニ入ルコトヲ  
許可サル。

十一月六日 「〇七〇〇時西貢着

十一月二十三日「輸送船「トコカワ」丸  
ニテ出航

十一月二十五日「海南島「サマ」着「カ  
シイ」丸ニ移乗

十二月五日 「輸送船三十隻ハ海軍ニ  
護衛サレ作戰地ヘ向フ

十二月八日 「泰國「シンゴラ」ヘ敵  
前上陸ス

(聯合軍翻譯通譯部時專翻譯第五七號三一  
頁)

所有者並部隊不明ノ日記ニ左記ノ事項ガ  
書カレテアル。

一九四一年十一月二十四日「海南島「海  
口」着

十一月二十七日「海口出航

111

十一月三十日、「フメン」着  
 十二月二日、「フメン」出航  
 十二月四日、「サマ」港着  
 十二月五日、「〇四〇〇」時作戦ノ爲出航  
 十二月八日、「〇一四〇」時マレイ半島「シ  
 ンゴラ」ニ到着

(聯合軍翻譯通譯部報第七四七號六頁)

二十四、一九四一年十二月六日

所有者不明ノ日記ニ左記ノ事項ガ書カレ  
 テアル。

一九四一年十二月六日「大福丸」船上。

「ミヤジ」分隊、「グアム」ヲ上陸攻還ス  
 ル第三分隊命令。

一、上陸地點ニ於ケル地形並敵ノ状態ハ既  
 ニ指示サレリ、此ノ中隊ハ大隊左翼ノ  
 第一線ナルモノトス。

(聯合軍翻譯通譯部捕獲書類第九九號一頁)

二十五、一九四一年十二月七日

イ、復讐ノ日。

佐世保第五海軍特別陸戦隊「三宅ヨシ  
 タカ」所有ノ日記ニ左記ノ事項ガ書カ  
 レテアル。



Doc 1628

十一月三十日「フメン」着  
十二月二日「フメン」出航  
十二月四日「サマ」港着  
十二月五日「〇四〇〇」時作戦ノ爲出航  
十二月八日「〇一四〇」時マレイ半島「シ  
ンゴラ」ニ到着

(聯合軍翻譯通譯部報第七四七號六頁)

二十四、一九四一年十二月六日

所有者不明ノ日記ニ左記ノ事項ガ書カレ  
テアル。

一九四一年十二月六日「大福丸」船上。

「ミヤジ」分隊、「グアム」ヲ上陸攻撃ス  
ル第三分隊命令。

一、上陸地盤ニ於ケル地形並敵ノ状態ハ既  
ニ指示サレリ、此ノ中隊ハ大隊左翼ノ  
第一線ナルモトス。

(聯合軍翻譯通譯部捕獲書類第九九號一頁)

二十五、一九四一年十二月七日

イ、復讐ノ日。

佐世保第五海軍特別陸戰隊「三宅ヨシ  
タカ」所有ノ日記ニ左記ノ事項ガ書カ  
レテアル。

112

Doc 1628

一九四一年十一月二十四日一〇〇〇時「バラオ」ニ向ケ出航。

十一月二十五日一二〇〇〇時ニ我々ハ航路變更海南島「サマ」ヘ直航スル様命ゼラル。

十二月四日一〇八〇〇時「サマ」港到着。

七日「カムラン」灣へ出航 艦長ハ英國、合衆國及和蘭ニ對スル宣戰布告ニ就イテ話ヲシタ。總員悦ンダ。終ニ復讐ノ日ハ來タノデアル。

十二月九日「カムラン」灣着

(聯合軍翻譯通譯部時譯第五七號二一頁)

第二章 爾余ノ戦争準備

廿六 訓練計畫

(イ) 對米取秘密訓練

一九四三年（昭和十八年）十一月一日附海軍省發行取線文庫ニ掲載サレタル戸淵彦太夫著作「深山屋多品大將ノ生涯」ト題スル論文ノ拔萃ニハ次ノ如ク譽カレテアル。

「一九一八年（大正七年）六月彼ハ第二艦隊司令長官ト成リ、一九一九年（大正八年）一月大將ニ昇進第一艦隊司令長官トナル。

其後聯合艦隊司令長官ニ補セラレ直チニ峻嚴ナル對米取秘密訓練計畫ヲ實施シタ。」

（聯合軍部時要誌第一一四號一―三頁）

(ロ) 作戦研究

米國陸軍省軍事情報局ノ發行ノモノデ全ク日本ノ材料ニ基キテ書カレタル日本ノ地上作戦（作戦研究第三）ハ日本ノ戦争準備ヲ次ノ様ニ譽イテ居ル。

「戦闘ニ於ケル各種ノ任務ヲ負ハサレソノ爲準備シテイタ部隊及指揮官達ハ豫メ數ヶ月前ニ選定セラレ、戦ガ行ハレントスル地方ノ地勢ト氣候状態ニ略近似セル特別訓練地域ニ集結サレタ。」

馬來軍ハ海南及印度支那ニ於テ比律賓軍ハ臺灣ニ於テ訓練ヲ受ケ兩軍共上陸作戰ヲ一九四一年（昭和十六年）ノ晩夏カラ秋ニカケテ南支那沿岸ニテ練習シタ。香港攻取ニ選定サレタ部隊テサヘ廣東近クノ山中テ夜襲ヤトイチカ強襲ノ猛烈ナ訓練ヲ受ケタモノデアル。

「日本ノ評論家達モ最高司令部ガ當時有力ナル敵ノ勢力、配備及敵ガ取ルト思ハル、防禦計畫ニ關シテ開戦前一ケ年間充分ナル報告ヲ受ケテ居タト云フ事ヲ少シモ秘密ニシテイナイ。

「一九四一年（昭和十六年）夏ノ間ニ編成サレタ機動部隊（即チ陸海軍共同部隊）ハ戦端開始マデ引續キ共同シテ訓練シ行動シタ。

「其作戦ニ用ヒラレタ軍隊（ルソンノビガンニ於ケルモノ）及リンガヤンニ於ケル軍後ノ上陸作戰ニ用ヒラレタモノハ夏ノ間陸東カラ印度支那國境マデノ支那沿岸ニ於テ上陸作戰ヲ演習シタノデアル。是等ノ作戰ノ結果得タル軍學上ノ利益ハヨシ有ツタトスルモ極メテ妙ク今トナレバ彼等ハ一回鍛練ヘ鍛練ヘト心掛ケタモノ、機デアル。

「日本側ノ記事ハクラ地峽並ビニ馬來半島ヲ  
 通ジテ數年ニ亘リ入念ニ行ツタ調査ト間諜行  
 動ニ關シテハ僅カナル暗示ヲ與ヘルガ一九四  
 一年（昭和十六年）ノ夏秋ノ候ニヤツタ準備  
 工作ニ關シテハ何ノ臆面モナク記述シテ居ル。  
 ソレ等ノ内ニハ軍隊ヲクラ地峽ニ上陸サス事  
 バンコックーシンガポール鐵道ヲ使用スル事、  
 及其遠征軍ノ用途ニ當テル軍需品ヲ貯藏スル  
 取極ニ關スル泰國トノ協商ガ有ル。

「第一次ニ上陸スル任務ヲ與ヘラレタ兵員ハ  
 永年支那デ勤務セル部隊ヨリ選抜セラレタル  
 將兵デアツテ盡サネバナラヌ任務ノ爲メ特ニ  
 裝備サレタ二箇師團ニ編成サレタ。作戦ニ使  
 用セラル、軍ノ凡テハ秋一杯印度支那及海南  
 島デ其ノ戦フベキ地形ニ似通ツタ撰定地區ニ  
 於テ猛訓練ヲ受ケタ。コレ等ノ部隊ガ馬來ニ  
 上陸シタ時ニハ英國側テ予想シタ如ク其氣候  
 風土ニ慣レテ居ナイト云フコトガ無ク彼等ガ  
 接觸スル如何ナル部隊トモ比敵スル熟練シタ  
 密林戦士デアツタ。此上陸ヲナシタ師團ハ九  
 月一杯南支那沿岸ニ於テ比律賓ニ同一作業ヲ  
 行フベク練習シテ居タ部隊ト一所ニ上陸作戦  
 ヲ實習シタモノデアツタ。

「攻撃ニ定メラレタ時期ガ近ツクニ從ツテ此  
軍隊ハ其訓練地域ヨリ引拔カレ外國ノ密偵ノ  
目ヲ遠ザケテ全ク安全ニ大軍勢ノ集結シ得ル  
海南島ニ集合シタ。茲テ彼等ハ完全ニ再裝備  
ヲ施サレ新式銃、戰車及其他ノ最新式裝備テ  
完全ニ再裝備サレタ。此等ノ新材料ヲ以テ數  
週間ノ訓練シ遠征ハ其大試練ノ爲調ツタ。・・。  
」半島ヲ下ツテ進行中餘リ活動ヲ見ナカツタガ、  
此ノジヨホール海峡強襲ノ任務ニ備ヘル爲メ  
河川横斷ノ特別訓練ヲ受ケタ二管師團ハ今度  
半島ヲ下リナガラ戰鬪ヲ繼續シテ來タ師團ノ  
交代トシテ廻サレタ。

(日本陸上作戦(作戰研究第三)九、廿一、卅五、四五  
四六頁)

(ハ) シンガポール強襲訓練

獨立工兵第十五聯隊長陸軍大佐横山與助ハ同  
聯隊ニ關スル一九四二年(昭和十七年)五月  
廿五日附ノ報告書中ニ次ノ如キ陳述ヲ成シタ。  
茲テ特ニ注意スベキコトハ彼等ガ受ケタ訓練  
ガ馬來戰殊ニシンガポール強襲ニ最モ缺クベ  
カラザル種類ノモノデアツタト云フ事デアル。  
「別紙記述ノ戰況報告ノ摘要ニモ示サレタル

115

ガ如ク此部隊ハ一九三八年（昭和十三年）九月ニ於テ第四工兵聯隊ヨリ組織サレタモノデアル。

「去ル十二月下旬ヨリ部隊ハ馬來及シンガポールノ占領トスマトラノ作戦ニ参加シタ。

「元來此部隊ノ任務ハ師團工兵隊ノト同一ナル「A」聯隊ノ任務デアツタガ約一ケ年間トイチカ強襲戦術トエンデンガ外部ニトリツケラレタ偏平底船ヲ使用スル作戦ニ重キヲ置キ訓練サレタモノデ（コレ等ノ船ハ河川渡河作戦ニ用ヒラレル）コレガ爲全員ハソレ等ノ船ヲ取扱ヒ得ル「E」聯隊トシテハ大河ノ渡河ヲナシ得ル様ニナツタ。

「彼等ハピンヤンノ作戦ノ爲軍司令ヨリ感状ヲ又馬來作戦及シンガポール敵前渡河ヲナシテ感状二通ヲ受ケタ。」

（SOPAC 聯隊連絡番號第〇八二五號五十九項目、一、二、四頁）

(二) 比島戰訓練ヲ實施

「ヒリツピン上空ノ海鷲」ヒリツピン作戦ニ参加シタル海軍ノ飛航搭乗員ト報道班員安達一雄トノ一連ノ會談デアル「比島上空ノ海鷲」ニハ無名ノ日本操縦士ノ言葉ヲ次ノ如ク傳へ

テ居ル。

「私ハ十二月八日ニ受ケタ最初ノ刺戟ヲ終生  
忘レ得ナイデアラウ。ソレハマニラヘ向ツテ  
進軍中ノ部隊ノ編成ヲ見テ喜ビノ餘リ流ルハ  
涙ヲ禁ジ得ナカツタ感激デアル。吾々ハ此ノ  
戦争ニ備ヘル爲永イ間ノ猛訓練ヲ經テ來テ今  
ヤ吾々ハ壯烈ナル突撃ヲ決行シタノダ。」

(聯合軍譯通譯部敵御出版物第六號廿三頁)

### 廿七 基地ノ建設

#### (イ) パラオ

一九四二年(昭和十七年)七月一日附ノ第  
三十五歩兵旅團司令部發行「パラオノ特殊性  
格ニ基ツク宿營並ニ供給品ニ關スル注意」ト  
題スル獲收書類ノ翻譯ニハ次ノ如ク書カレテ  
有ル。

要點。「パラオハ南洋羣ノ所在地ニシテ第一  
次世界戦争ノ結果委任統治領トナリシヨリ以  
來吾政府ハソノ今日ノ役割ヲ豫想シタ。  
元來統治困難ノ場所デアツタガ海軍ハ確實ニ  
作戦基地トシテノ其設備ヲ完了シタ。」

歩兵旅團長

河口陸軍少將



(イ) 金屬類ノ蒐集

一九四一年（昭和十六年）八月廿五日附ノ井關啓參謀長今田新太郎ヨリ近藤隆ノ隊長近藤新八宛發セラレタル命令ノ抜萃ニハ次ノ如ク書カレテアル。

「現今ノ世界國際狀勢ト國家的軍備ノ擴張ニ依リ此地域ノ資源ヲ開發利用スルコトノ重要性ヲ考慮スル必要アリ、是等軍需品ノ獲得ハ軍當局ニ依ル獲得ト一般市民機關ニ依ル購入トニ分ツ。

市民ニ依ツテ獲得サルベキ物ハ、銅原礦、銅線屑、銅屑、眞鍮屑、炭、鎔解セル英、錫、硬貨、白鐵、アンチモニイ原礦デアアル。

「北支那ノ屑鐵ハ日本製鐵株式會社ニ依ツテ獲得セラルベシ。

其他ノ資源ニシテ獲得スベキ物ハニツケル、コバルト、タングステン原礦、モレブテナム原礦、銅、鉛、亜鉛、水銀、高級アスベスト、高級雲母、不燃性金屬、刃金並ニ其他ノ礦物デアアル。

「軍部ニ依ツテ組織サレタ調査班ノ報告ニ依レバヤンチエン地方ニハ鐵、硫黃、坭石粉及

亞鉛又スエチユアンリン地方ニハ鐵アルラン  
イト。」

(聯合軍機部報第一五五號廿九、卅頁)

廿九 眞珠灣ニ對スル小形潛航艇攻運準備

(イ) 豫メ計畫サル。

「一九四二年三月六日附ノ大本營海軍報道部  
長海軍大佐平出秀夫ノ誓キタル「特別海軍攻  
撃隊ノ勇士」ト題スル潜水艇ノ眞珠灣攻撃ニ  
關スル記事ニ次ノ如ク述ベテアル。

「世界平和ニ對スル吾等ノ大ナル眞意ト使命  
ヲ無視シ日本帝國ノ生命マデモ嚇カサントシ  
タ無謀ナル亞米利加ニ對スル破壞主義的攻撃  
ノ時吾等ノ生命ヲ捨シテ敵ノ心臓部ヲ目掛ケ  
テ猛烈果敢ノ第一撃ヲ加ヘタ。此大成業ニ生  
命ヲ喪ヒタル是等特別攻撃隊ノ人々ニ對シ最  
大ナル敬意ヲ拂ヒ此報告ヲ爲ス。

大本營公報(一五〇〇 三月六日)

「特別海軍攻撃隊ノ眞珠灣ニ對スル光輝アル  
比類ナキ強襲ハ既ニ公報ヲ以テ發表シタルモ  
全世界國民ノ心胆ヲ寒カラシメタ此攻撃ノ計  
畫ハ岩佐大尉ト其他數名ノ士官ニ依ツテ考出  
敢行サレタノデアル。コノ計畫ハ危急アル場

合ヲ考慮シテノ愛國忠誠ノ念ヨリ此等ノ人々  
ニヨツテ考出サレタモノテ彼等ノ上官ヲ通ジ  
テ聯合艦隊司令長官ニ秘密裡ニ提出サレタモ  
ノデアアル。

「司令長官ハ此ノ計畫ヲ篤ト研究ノ末其ノ成  
功ト實行可能性ヲ認メタ。故ニ長官ハ此提出  
者達ノ熱烈ナル希望ヲ受ケ入レタ。部内テ嚴  
重ナル秘密ヲ守リツ、職術家ト技術家將又勞  
務者ニ依ツテ短期間内ニ日夜不眠不休デナサ  
レタ準備的訓練ト製造ノ研究ノ結果戰爭開始  
前ニ彼等ノ仕事ヲ完成スルコトガ出來タノデ  
アル。

「此ノ攻取ハ報告ニモ有ルガ如ク岩佐大尉並  
ニ其他ノ士官ニ依ツテ考出サレタモノデアアル。  
彼等ハ彼等自身テ丹精ヲコメテ案ヲ考出シタ  
ノデアアル。忠誠奉國ノ誠ヲ盡サント欲シ是等  
ノ人々ハ人間ニハ到底及ビ難シト認メラレタ  
勳功ヲ計畫シタノデアアル。爾後數ヶ月間是等  
ノ人々ハ萬一ニモ失敗無カラシメン旨ニ言語  
ニ絶スル難訓練ヲ實行シタノデアアル。」

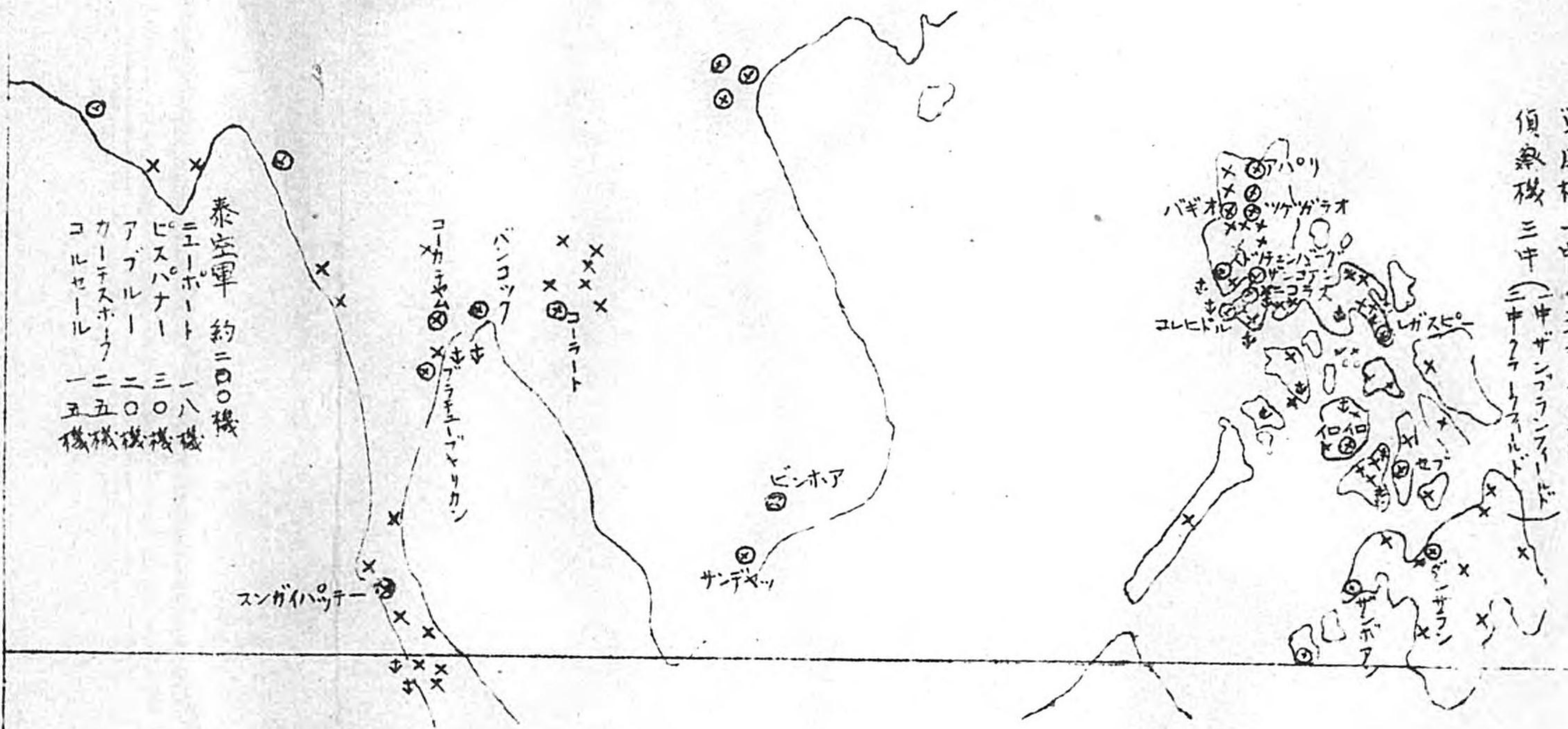
一九四二年十月ニ第五十一師團司令部ニ依  
ツテ印刷サレタ小冊子中ニ掲載サレテ居ル「誠」

ト題スル第四ノ講演ニハ次ノ語句ガ書カレテ  
アル。

「尙又最近支那事變ヤ大東亞戰ニ於テ吾等ノ  
生國ハ實ニ陸ニハ飯月大尉海ニハ岩佐中佐ノ  
如キ戰場勇士ヲ出シタコトニ誇ヲ感ジ得ルモ  
ノデアアル。勿論戰爭ノ當初岩佐中佐ヤ其部下  
ノ九勇士ノ眞珠灣ニ於ケル果敢ナル偉業ハ思  
ツテサヘ涙グマシイハ勇壯ナル勲功デアッタ。  
將タ亦此功業其物ニ對スル準備ト期待ト下ニ秘裡  
密裡ニ過サレタ時間ヲ想像スルト何カシラ名  
狀シ難キ莊嚴ナ事デアルト云フ事ヲ感ジル。  
特殊潛航艇攻撃ガ九人ノ英雄其者ニ因ツテ企  
テラレ敢行セラレタト云フ事ハ周知ノ事デア  
ル。如何ニ英雄ト雖モ彼等ハ木石物ニ非ズ孰  
レカト云ヘバ彼等ハ超人的熱情ト共ニ超人的  
専心力ノ持主デアッタト思フ。一心ヲ常ニ訓  
練ニ注イタ苦闘ノ數ヶ月間ニ於ケル彼等ノ熱  
心サニ對シテ吾人ハ神人共ニ拵ガス忠誠ノ總  
鑑ヲ仰ギ見テ居ル感ニ充サル、ノデアアル」

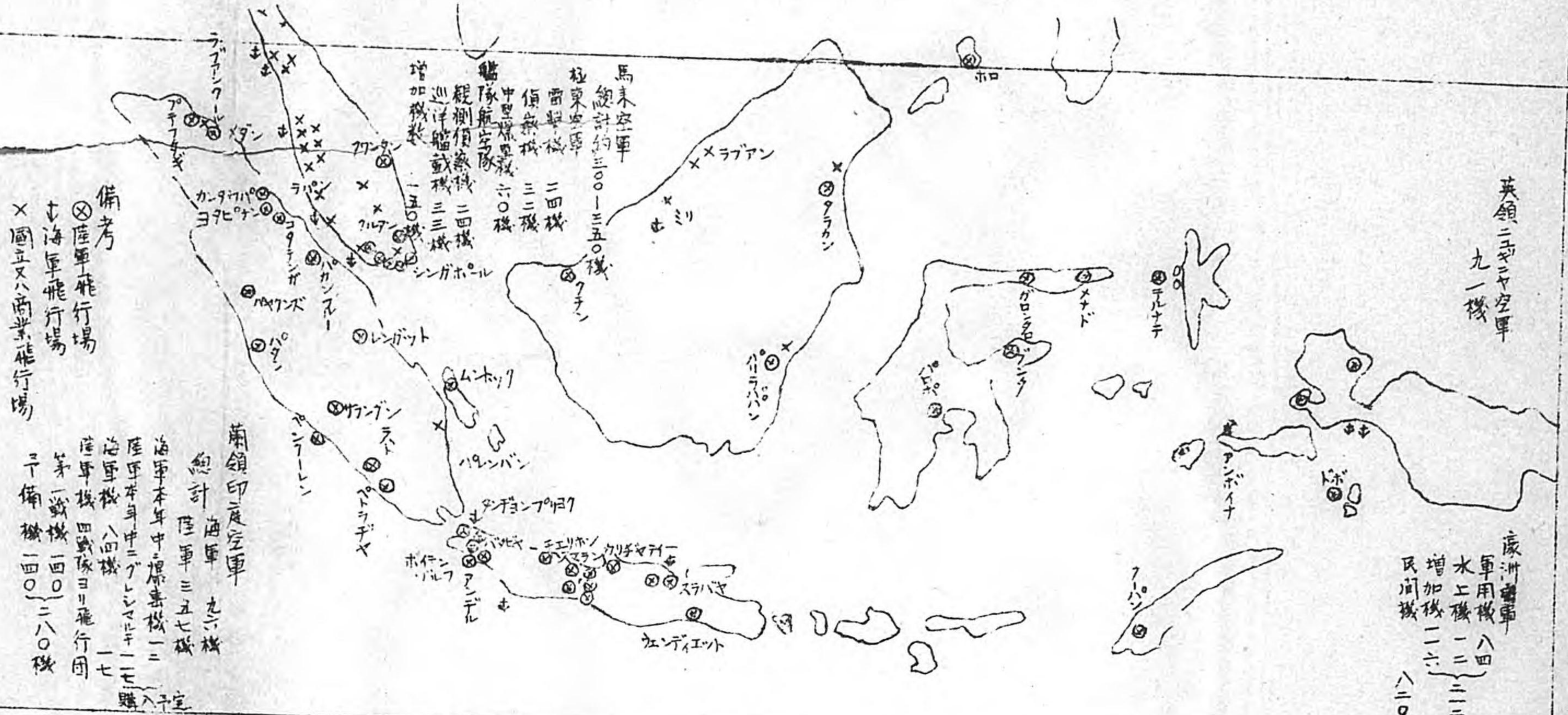
(聯合電報通譯部敵側出版物 第八十號一〇頁)

南洋諸島空軍配置要圖



泰空軍 約二〇〇機  
ニューポート 一八機  
ビスパナ 三〇機  
アブル 二〇機  
カークスホフ 二五機  
コルセール 五機

軍防空隊防空情報第一號 十二月六日 基隆  
判決 本要圖ハ情報緊迫前ノモノニテ近時著シク  
増強セリソニルモト判決ス  
米國空軍 總計約一五〇—二〇〇機  
陸軍爆撃機 一中  
戦術機 一中  
偵察機 一中  
海軍戦術機 一中  
爆撃機 一中  
比島空軍 總計約四一機  
戦術機 一中  
偵察機 三中  
二中  
三



第三圖 南洋ニ於テ之聯合空軍 配備及兵力ヲ示ス略圖ノ解説

第三章 戦前ノ間諜行爲ト偵察

三十、一般

イ、一九四一年ノ昭和十六年ノ八月以來ノ南方ノ情勢ノ變化ヲ示ス略表

第二十師團司令部ニヨリ發表セラレ、第二圖トシテ、示ス表ニハ日附ガナイガ、內的證據ニヨリ、コレ等ノ諸元ガ戰爭勃發ニ先ダチ、集メラレタコトハ明カデアアル、表ノ中デ、日本側ノ確カナ筋ヨリトツタヤワニ思ハレル報道ヲ含ンデキル部分ダケヲ再ビ表ニシタモノデアアル  
(A T I S 書類第九〇〇三初版)

一九四一年ノ昭和十六年ノ八月以來ノ南方狀勢ニ於ケル變化ヲ示ス簡略表

第二十師團司令部

報	摘	要	日附	報道源	發信所
	緬甸タイ國境ニ於ケル兵力ハ約五萬デ緬甸ニハ更ニ義勇軍カラ二千乃至三千名ノ兵力ガ出來ルデアラウ		九月半バ	參謀長 報告	
	一萬人ノ派兵ガマレー半島ニ於ケル兵力ニ増加サレタモノト思ハレル(八月半バニ約五千名ノ派兵)				

126

<p>兵ガシンガポールニ居リ、八月末ニハ數ニツイテハ何ノシラセモナイイガ、溟洲兵ヲ乗セタ輸送船ガシンガポールニ到着シテキル。</p> <p>コレマデニ、四萬八千人ノ正規軍ガ、約六萬人ニ達シテキル。其ノ上、モシ我々ガ印度軍ノ増加數ヲ大体見積ツテミルト（確カナ情報ニヨル増加數デハナイガ）八月末ノシンガポール外務官憲ニ依ル七萬一千名カラ七萬五千名ノ見積リヨリ多クハナラナイデアラウ、</p>	<p>十月末</p>	<p>參謀長 報告</p>
---	------------	-------------------

第二圖

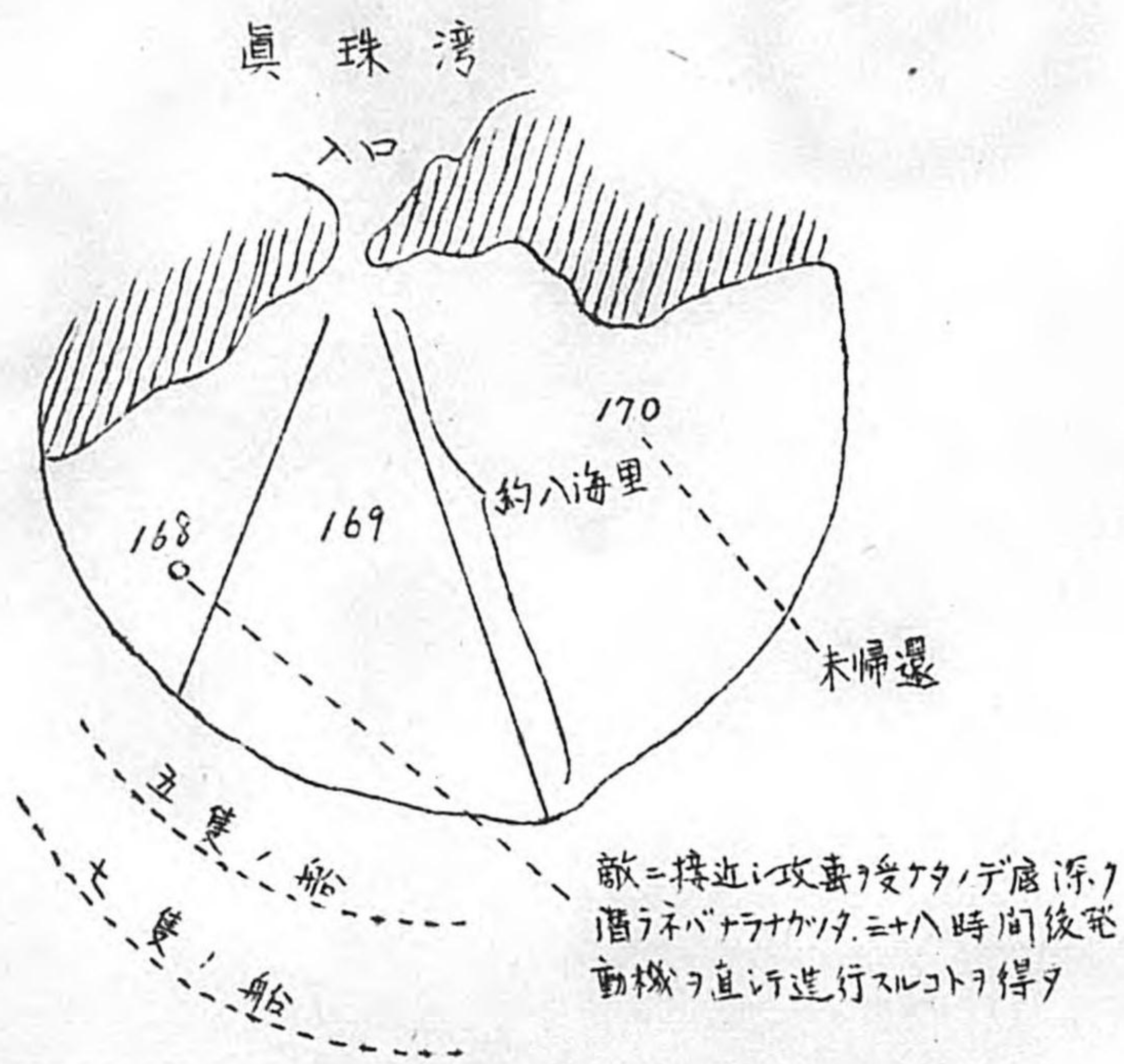
一九四一年八月以來ノ南方狀勢ニ於ケル變化ヲ示ス表カラノ  
拔萃

ロ、南西太平洋域ニ於ケル聯合空軍カラ示ス略

圖

陸軍防空隊ニヨリ發行セラレ「防空情報第一號」ト名稱ヅケラレタコロノ、南洋諸島ニ於ケル聯合空軍ノ配備及ビ兵力ヲ示ス略圖ガ、第三圖トシテ再製ス、コノ略圖ハ一九四一年ノ昭





第四圖 奇襲攻撃以前=日本潜水艦=ヨル真珠湾附近  
ノ偵察ヲ示ス要圖

127A

和十六年ノ十二月六日ノ日附ガアルガ註書ハ此  
ガ「危機前ニ」用意サレタト述ベテキル。

(A T I S 敵側發行物第十一號 十六頁)

三十一、潜水艦ニヨル戰前ノ眞珠灣偵察

イ、攻撃前ニ偵察シタ

「潜水艦及對潜水艦行動ノ特質」ト云フ題ノ、  
日附モナクドノ筋カラ出タカモ明カデナイ獲得  
本ノ中ニ次ノヤワナ一節ガアル、コレニ添ヘテ  
アル要圖ヲ四圖トシテ復寫ス。

「チ、視察ト偵察

ハワイ奇襲攻撃ノ前ニ日本ノ最優秀潜水艦(約  
三十隻)ガ眞珠灣偵察並ニ視察ノ役ヲ命ゼラレ  
タ

(A T I S 巻第一五八〇七號 初版)

三十二、日本側情報機關ノ評價セル戰爭勃發前ノ  
フィリッピン群島ノ米軍兵力  
イ、合衆國兵力——フィリッピン群島

一九四一年ノ昭和十六年ノ七月カラ十二月マ  
デノ日附ガアリ「第三號戰爭勃發以前ノ双方ノ  
狀勢」ト題シタ、ドノ筋ヨリ出タモノカ明カデ  
ナイ、肉筆ノ綴込書類ハ一部次ノ如クデアル。  
「フィリッピン群島ニ於ケルアメリカ守備軍兵  
カハ一萬二千(米兵約五千五百、土民約六千五

百)ヲ數ヘタ。シカシ、國際狀勢ニ依リ、コノ數ニ更ニ五千二百ノ米兵ト六千ノ土民兵ガ増加サレ今年ノ七月迄ニ總數二萬二千ニ達シタ。フイリツピン國民軍並ニ巡察斥候兵ハフイリツピンニ於ケル全部隊ノ統一セル指揮權ヲ取ル管デアツタ米國極東軍司令官陸軍大將マツカーサー指揮下ニ入レラレタ。

「アメリカ守備軍ノ狀態

「一、フイリツピン師團

第二四歩兵旅團ハ平常時ニハ行動シテイナカツタガ、ソノ司令部ガサンチマゴノSAMCO H I M A G O / ニ、一九四一年七月頃設立サレタ。

「二、第九四戰車大隊 (アメリカノモノ) ガストツセンベルクノSTOTTSENBURGノ要塞デ新ニ組織サレタ

「三、空軍兵力ハ引續キ左ノ如ク増加シテ來タ

陸軍

第二四追撃聯隊	P	1	35
第三追撃中隊	P	1	36
第一七追撃中隊	P	1	38
第二〇追撃中隊	P	1	40
第二四追撃中隊			

リノニ型コヲラ含メテ飛行場ニ上テ記

百)ヲ數ヘタ。シカシ、國際狀勢ニ依リ、コノ數ニ更ニ五千二百ノ米兵ト六千ノ土民兵ガ増加サレ今年ノ七月迄ニ總數二萬二千ニ達シタ。フイリツピン國民軍並ニ巡察斥候兵ハフイリツピンニ於ケル全部隊ノ統一セル指揮權ヲ取ル管デアツタ米國極東軍司令官陸軍大將マツカーサー指揮下ニ入レラレタ。

「アメリカ守備軍ノ狀態

「一、フイリツピン師團

第二四歩兵旅團ハ平常時ニハ行動シテイナカツタガ、ソノ司令部ガサンチマゴ/SANCOHIMAGOノニ、一九四一年七月頃設立サレタ。

「二、第九四戰車大隊(アメリカノモノ)ガストツセンベルク/STOTSENBURGノ要塞デ新ニ組織サレタ

「三、空軍兵力ハ引續キ左ノ如ク増加シテ來タ

陸軍

第二四追撃聯隊	P	1	35
第三追撃中隊	P	1	36
第一七追撃中隊	P	1	38
第二〇追撃中隊	P	1	40
第二四追撃中隊			

リノニ型コ  
ヲラ含メテ二七機上  
ア記

第一九爆撃聯隊

第一 追撃中隊

第一四爆撃中隊

B 1 J7 (一二機)

第二八爆撃中隊

B 1 I8 (一三機)

第三六爆撃中隊

(飛行機ノ型不明)

第二 偵察中隊

0 1 I9、0 1 46、

第一九偵察中隊

0 1 47、0 1 52、(一三機)

「四、フイリツピン防禦條令ハ七千六百名ノ將兵ノ師團ヲ發育スルコトヲ請求シテキル(別紙ニ依ル)

然シ、多クノ師團ハ完全ナドコロデハナク、中ニハ、聯隊長サヘ足リナイ有様デアル亦必要ナ裝具モ支給サレテ居ラズ、歩兵聯隊ノ中ニハ歩兵砲ガ支給サレテキナイノモアル  
「五、ルソン島ニ於ケル訓練場ハ左ノ居クデア  
ル、

アパリ / APPARI /                      ラオアグ / LAOAG /

ヴィガン / VIGAN /                      バングエツト / BANGUED /

トリダニト /                      FORIDAHITO /

エカゲメ / ECHAGUE /                      ツゲカラオ / TUGUECARAO /

「第十二歩兵聯隊ハ、ルソン島デ演習ヲ行ツテ  
キル

「六、防禦ノ爲、ルソン島ハ北部ト南部ノ地區

ニ分割サレテキル、

「七、情報ニ依レバ一隻ノ米國船ト四隻ノ潜水艦カ、十一月三十日、十八時十分頃、台湾高雄省ガランピーノGARRANPIノ東方水平線上ニ、現レタト云フコトデアル、亦十八時三十分頃一隻ノ大キナ船ト三隻ノ潜水艦ガガランピーノGARRANPIノ北東十哩附近ヲ南航シタ、潜水艦ガ十一月十六日頃各地ニ向ケテマニラヲ發テ、ソノ中ノ若干ガパラオ島附近デ行動シテキルト報ゼラレテキル、

「(二) 數日前北部ルソン島ノ第十二歩兵聯隊ガ中央ルソン島ノワシガンノUSHINGANノニ移動シタ様デアル、

外信傳受ニ依レバカガヤン河ニ沿ツテキルアハリノAPARRIノ、ツゲガラオノTUGUEGARRAOノ及ビエカゲノEGHAGV Eノ軍隊ニ七〇銃ト四〇銃ノ砲彈ヲ送ルヤウニト云フ電報ガアツタ。是等ノ砲彈ハ土民軍ノタメノモノラシク、亦主力ハ中央ルソン島ニ集中サレルヤワデアル、中央ルソン島ニアルト報ゼラレテキル飛行機ハ左ノ如クデア

Doc 1625

爆撃機

三十

海軍偵察機

二十

計

百八十

(A T I S 時事秘録、第四十六號 第一、二

頁)

三十三、南領東印度ニ於ケル戦前間諜及破壊行爲  
 イ、一九三五年ヨリ一九四〇年(一九四一年)  
 マデノ南領東印度ノ防禦兵力カラ示ス略圖  
 日附カナク、下ノ筋カラ出タカモ明カデナイ  
 「ジャヴァ」スマトラ及バリ島ニ於ケル南領東  
 印度軍ノ配備及ビ兵力ヲ示ス三枚ノ獲得略圖ハ  
 第五・六、及七圖トシテ復寫ス。是等略圖ハ個  
 々ニ日附ガシテナイガ、中ノ一ツハ「一九三五  
 年ノ昭和十年ノヨリ現在マデ」ト書附ケテアル  
 コノ現在トハ内容ヨリ判断スルト一九四〇年ノ  
 昭和十五年ノ或ハ一九四一年ノ昭和十六年ノニ  
 當ルヤワニ思ハレル、

(A T I S 時事秘録第百六號六一頁ヨリ六三

頁)

102

133/32A

# ジャバ島兵力配備略圖

ホルネオ



土民正規兵 126,000  
 和蘭正規兵 9,000  
 義勇兵 17,000  
 (訳者註 不明瞭)

半分歩兵大隊 (=4中隊)  
 一小隊 民兵騎兵隊  
 軍需資材兵舎倉庫  
 コ、他 = 特別 = 組織サレタ  
 バンカラシヤ近衛兵隊アリ

\*訳者註

ラバ (= 多分 フラナ)

1935ヨリ現在マデ

装甲中隊  
 工兵分遣隊 (探照隊)  
 一般倉庫  
 => 歩兵聯隊本部  
 軍需資材兵舎  
 倉庫 騎兵隊  
 二中隊  
 五中隊  
 空軍部隊本部 工兵分遣隊  
 (無了隊)  
 一工兵大隊本部 (機動部隊)  
 装甲中隊、タケ部隊  
 A、C、D 部隊  
 騎兵聯隊本部  
 三A/A 砲兵大隊  
 一五歩兵大隊 (四中隊)  
 歩兵補充大隊

一歩兵大隊 (三個中隊)  
 二歩兵大隊 (一個中隊)  
 四機關銃隊 歩兵砲隊  
 中隊下士官学校  
 六騎兵大隊  
 工兵 (機動部隊)  
 分遣隊  
 一 個歩兵中隊  
 (= 聯隊四大隊ヨリ)

半分歩兵大隊 (=4中隊)  
 (= 一隊 ハツキリス)  
 マウテネコ 部隊 (民兵 名稱)  
 (半分 大隊)  
 一小隊 民兵騎兵隊  
 (訳者註 多分 民兵  
 列車砲隊)

半分歩兵大隊 (=4中隊)  
 一小隊 民兵騎兵隊  
 軍需資材兵舎倉庫  
 コ、他 = 特別 = 組織サレタ  
 バンカラシヤ近衛兵隊アリ

三歩兵大隊  
 三A/A 大隊  
 工兵分遣隊  
 (= 大隊ヨリ)  
 (探照隊)  
 軍需資材兵舎倉庫  
 一般倉庫  
 機動工兵  
 分遣隊 (マラゲヨリ)  
 憲兵隊 = 大隊本部  
 海岸砲兵隊

三歩兵大隊  
 三A/A 大隊  
 工兵分遣隊  
 (= 大隊ヨリ)  
 (探照隊)  
 軍需資材兵舎倉庫  
 一般倉庫  
 機動工兵  
 分遣隊 (マラゲヨリ)  
 憲兵隊 = 大隊本部  
 海岸砲兵隊

ブラコチ隊 バリ島特設部隊、名稱  
 兵力 = 4 歩兵大隊 各大隊ハ  
 独立に組織サレキル

ハシヤン軍、名稱ハマドウラ (マツラ) 軍  
 兵力 = 3 歩兵大隊  
 各大隊ハ 独立に組織サレキル

三師団司令部  
 六歩兵聯隊本部  
 八、三、九 歩兵大隊  
 (計 十 = 4 中隊)  
 六騎兵隊  
 六機關銃隊及歩兵砲兵隊  
 一騎砲兵隊  
 二憲兵大隊、一中隊  
 列車砲隊、機動工兵、分遣隊 (一大隊ヨリ)

註 地名、横線ハト、假名專ヲ  
 ソ、マ、ロ、マ、キ、キ、シ、ダ、コ、ラ、示ス  
 (訳者註 原書類 = 依リテ正寫ス)

第五圖 ジャバ及バリ島 = 於此 蘭領東印度軍、配備並 = 兵力ヲ  
 示ス要圖、翻訳



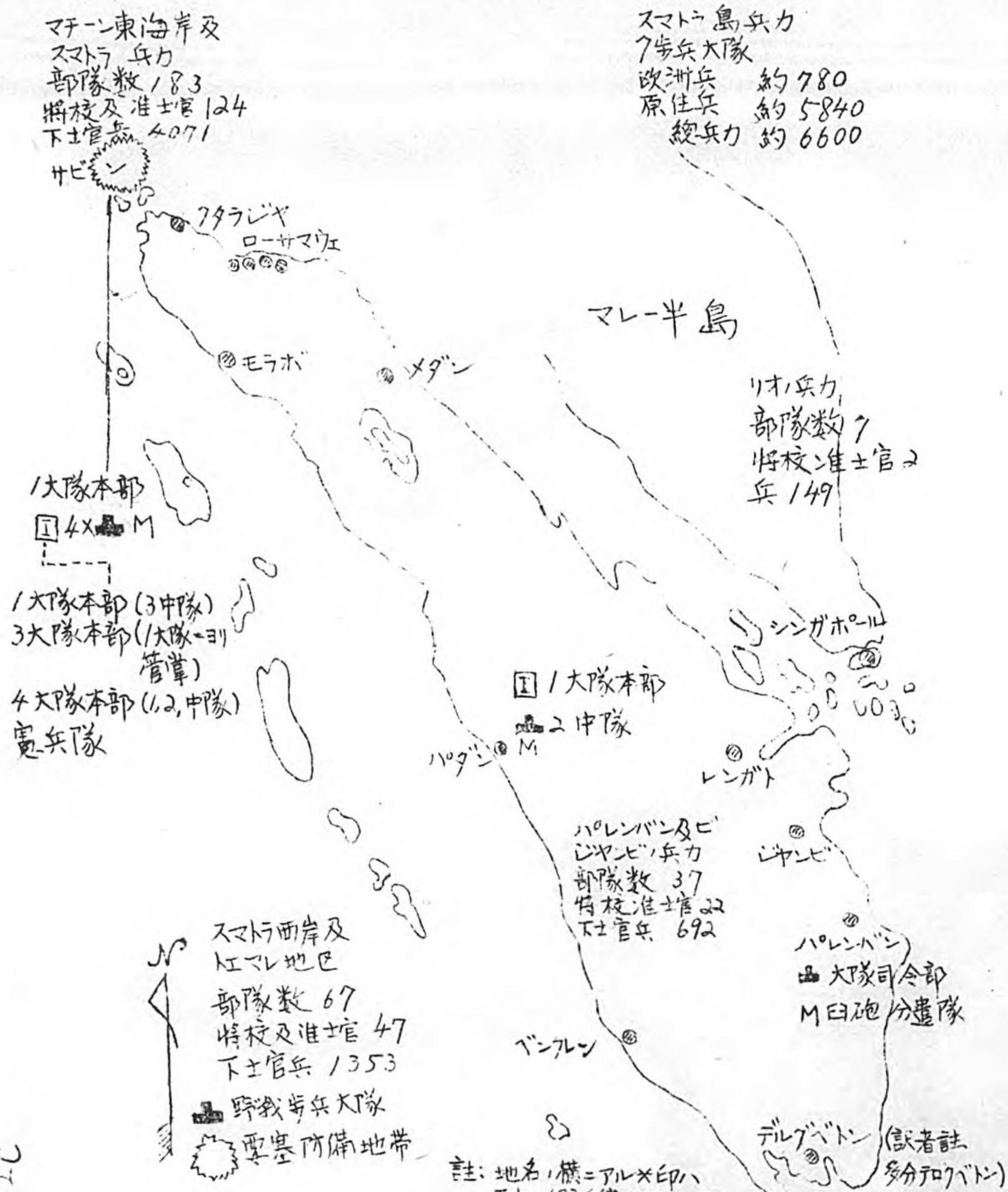
131 132

# ジャバ島軍備配置略図



第六図 ジャバ島軍備配置ヲ示ス要図、翻訳

# スマトラ島兵力配備要図



第七圖 スマトラ島蘭印軍、配備及兵力ヲ示セル要圖 (編訳)

1320

ロ、スマトラ住民ノ新生活

蘭領東印度諸島ニ於ケル日本ノ間諜行爲ト破壊的活動ノ長イ裏面史ハ「スマトラ人ノ新生活」ト題スル記事ヨリ引用ノ左記ノ如キ一節ニヨリ證明サレル。即チ

「オランダト戦鬪ヲ交ヘタノハアチーン人デアツテ最後マデ非常ニ勇敢ニ、ソノ獨立ヲ守ツタ。アチーン人ハ生來大膽デアリ、ソノ生地ハスマトラ島北端ニ位シ面積ハ臺灣ノ一倍半デ三面海ニ圍マレテキル。又多クノ山ト地理的要素ガアル。以上ノ理由デ原住民ハ一八七三年ヨリ四十年間モ猛烈ニ反抗スル事ガ出來タノデアル。之等ノ勇士達ハ一家族ニ支配サレテ、森ノ中ニ隠レ時々猛烈ナゲリラ戦ヲ行ツテハオランダ軍ヲ惱マシテキタ。最後ノ十年間ニハ日本青年伴モトヒコガ青年酋長バシナム/PANJANDノヲ助ケテ非常ニ努力ヲ拂ツタ事ハ一卷ノ武士道史デアツタ。シカシ一九二二年ノ大正十一年ノニハ伴モトヒコハ外務省ニヨリ日本へ召還サレ、ソノ爲アチーン人ハ遂ニ劍ヲ捨テテ降服シタノデアル。」(AT IS 書類第六九八四號 未發表)

(ハ) 蘭領東印度ニ於ケル日本將校

Doc 1628

134

蘭領東印度諸島ニ於テ日本ニヨリ行ハレタ  
 ラシキ間諜行爲ノゴク最近ノ局面ハ氏名不詳  
 ノ參謀將校ノ一中佐ガ書キ大阪毎日新聞ニ揭  
 載サレタ日本ノ對シヤヴァ作戦ノ記事ヨリノ  
 左記拔萃ニヨツテ洞察スルコトガ出來ル。即  
 チ「私達ガバンドンへ着イタ時ハモウ暗カツ  
 タ。ソノ夜遅ク私ハ「ホーマン」ホテルニ宿  
 ラトツタ。ソコハ二年以上前ニ泊ツタ所デア  
 ツタ。・・・  
 「午後陸軍司令官ニ面會ノ目的デ私ハバンド  
 ンノ北ニアル「イフラ」ホテルニ行キ一昨年  
 泊ツタ部屋ヲ求メタ。

(A T I S 敵側發行物第三十二號 十一頁)

135  
附四、ニューギニアニ於ケル戦前ノ商賈行爲

左記ノ英領ニューギニアノ情報報告ハ一九四一年ノ昭和十六年ノ三月ノ豊福テツヲ少佐ノ視察ニ基クモノデアアル。コノ豊福少佐ノ待タ経歴ハ其ノ後彼ガコノ地方ヲ後職ツタ、南海派遣隊ノ参謀ニ就任スルコトニヨツテ利用サレタ。ソノ報告ノ序文ト本文ハ次ノ如クデアアル。

英領ニューギニアニ於ケル軍事資料

参謀本部

南方軍總司令部ニヨリ作成

本部分遣隊司令部 一九四二年十月一日

「コノ資料ハ一九四一年ノ昭和十六年ノ三月ノ豊福テツヲ少佐ニヨル調査報告及ビソノ後入手、分類サレタ資料ヨリ編輯サレタモノデアアル。

「資料精査ノ爲ノ参考文書ハ一九四〇年ノ昭和十五年ノ九月軍令部發行『英領ニューギニアニ關スル軍事報告』、水陸部發行『ニューギニア方面航海指標』第二卷、海圖八五四、八五七、八五九、八七八號及ビ他ノ主要地圖デアアル。

「第一篇ノ英領ニューギニア及ビソロモン群島ノ軍事的價値

「コレヲノ蘭領東印度群島ト共ニ太平洋ヲ南北ニ横切ル自然ノ橋樑ヲ形成シテキル。ソノ北端ハ我が南洋委任統治諸島ノ大抵ノ部分ヨリ我が爆撃機ノ航線

距離内ニアリ、南端ハ濠洲ヨリノ懸崖ノ航線距離内ニアル。(我ガ南洋委任統治領ノトラツク島及ビボナベ島カラ濠洲委任領土ノ首府ラバウルマデ大凡一千軒デアル。

又、北濠洲ノクツクタウンカララバウルマデ大凡一千二百五十軒ボートモレスビーマデ大凡六百軒デアル。ソレハ狭イトレス海峡ニヨリ濠洲大陸ト分離シテキル。従ツテコロ領地ノ所有ハ南西太平洋ニ於ケル空海ノ支配權及對濠洲作戰ノ「飛石作戰」基地ノ獲得ヲ容易ナラシメル。

ニューギニアノ兩岸ノ支配特ニトレス海峡ノ支配ハ南太平洋ト印度洋ハ勿論蘭領東印度トノ間ノ聯絡ヲ絶ツコト、ナル。又敵艦隊ノ濠洲兩岸ヘノ迂回ヲ餘儀ナクサメルデアラウ。

「上記ノ如クコレハ南洋ニ於ケル日本ノ作戰殊ニ對濠洲作戰ニ對シテ戰略上重要ナ領土デアル事ガ考ヘラレル。ソノ上日本軍ハコロ地方ニ海、空軍基地トシテ使ハレテキル場所ガ多イトイフ事ヲ非常ニ幸運トシナケレバナライ。

「第二篇——英領ニューギニアニ於ケル上陸作戰上ノ觀察。

「ニューギニアハソレ自体デ長サハ二千五百軒以上テ廣サハ一番廣イ所デ七二〇軒以上デアル。英領ダ

ケノ面積ハ大凡四十萬平方軒デアル。ニューギニア  
ハ世界デ二番目ニ大キイ島デ日本ノ本州ヨリ約二萬  
平方軒大デアル。

「ビスマルク諸島ノ面積ハ大凡五萬平方軒デ我が台  
灣ト四國ヲ合セテ面積ト一致スル。シカシ之等領土  
（ニューギニアトビスマルク諸島）ノ人口ハ大凡八  
十五萬ノ土人デソノ中六萬ハ海岸地方ニ住ンデ居ル。  
」之等領土ハ未ダ何處モ發達シテ居ナイ。

「大部分ハ人が住ンデ居ナイノデ自然交通ノ便ガ惡  
ク道路デサヘ濠洲管下ニニューギニアノ官有道路ノヤ  
ウナモノデソノ總長ハダツタ百三十六哩（海算二百  
十八軒）ソノ中百九哩ハ中部地區ニアリ、十六哩ハ  
東部地區十一哩ハ南部地區ニアル。コレラノ道路ハ  
只海岸附近ノ村々ヲ連絡スルダケデアルト認メラレ  
テキル。

「現在ノ軍備ニ關シテハラバウル、ポートモレスビ  
」等々ノ如キ重要ナ政治及ビ輸送ノ中心地ニ小部隊  
ト設備ガアル様デアル。コノ領土ノ他ノ部分ハ全然  
防備サレテ居ナイ。

「ソレ故、之等島々ハノ上陸作戰ハ上陸可能デアレ  
バ何處デモ容易ニ遂行スル事ガ出來ル。シカシ、占  
據地點カラ陸路ニヨル前進ト占領ハ未開ノ道路設備  
ト補給ノ困難ノ爲非常ニ困難デ且ツ實際的ニ不可能

148  
デアラウ。ソレ故、タトヘ或一點ヲ占領シテモ、ソレハ單ニ同地點附近ヲ獲得スルニ留マリ、全領土ノ占領ハ敵ノ戰鬪精神ヲ全ク沮喪サセルノデナケレバ困難デアラウ。コノ地域ニ使用ノ日本軍隊ノ小兵力ニ鑑ミテコレハ尙更ソウデアアル。

「ソレ故、全島嶼群管理ヲ獲得スル爲ニハ主要都市ノ占領ガ最善ノ方法デアアル。斯クシテ軍事、政治、經濟、交通ノ主要地デアアル。ラバウル、ラエ、(濠洲委任領地ノ首府)及ビポートモレスビー(濠洲管下ニユীগニアノ首府)ノ上陸作戰ヲ試ミル事ハ得策デアアル。之等ノ領土ノ獲得ニドレダケノ兵力ガ使用サルベキカハ日本軍ノ作戰計畫ニ依ルモノデアアル。シカシ、敵ノ現在ノ防備ノ薄弱サ、及ビ將來濠洲ヨリコノ地域ニ送ラレル兵力ヲ考慮スレバ、大兵力ハ必要トシナイデアラウ。之等ノ都市ニハ住居ハアルガ、日用品等ニ食物ト飲料水ガ乏シク長期間ニ亘ル自給ハ困難デアアル。我々ノ必需品等ニ米、味噌及ビ醬油ハ全然貯蔵サレテ居ラズ、從ツテ後方ヨリノ補給ニ依ル外途ハナイ。

「後方ヨリノ補給ノ困難サハ認メラルベキデアリ、多量ノ運搬ガ必要トサレルデアラウ。

三、「ポートモレスビー上陸作戰

(一) 港及ビ都市ノ一般狀態



139

「一八七三年／明治六年／ニ創設サレタポートモレスビーハ濠洲管下ニユーギニアノ政廳所在地デアリ中部地方ノ地方政廳所在地デアル。此處ニハ良好ナ廣イ港ガアリ、ハヌダマヴア島（港口ニアル）ト東方ハ約一、五哩ノボギロホドビー岬ノ間ヲ通過シ灣ニ入ルノデアル。一九四〇年／昭和十五年／ノ始メニハ約八百人ノ歐洲人、約二十人ノ支那人ガ居リ日本人居住者ハ居ナカツタ。土人種（約二千人）ハ水上ニ村ヲ作り白人居住民ト離レテ住ンデ居ル。市ハ港ノ東岸ニ位スルトウアグバ山トエラ山トノ間ニ在リ、濠洲管下ニユーギニアノ政治、軍事、經濟、運輸、通信等ノ中心デアル。ソコニハ政廳、其ノ出張所、放送局、政府經營發電所、教會、學校、歐洲人及び原住民ノ病院、製氷工場、銀行、ホテル等々ヲ含ム種々ノ官廳營業所ガアル。

(二) 海軍基地トシテノポートモレスビーノ價值

「港ハ艦隊基地トシテハ稍小サイガ深サハ相當ニ深ク（最深十尋）底ハ沖積土デ一艦隊カ、二艦隊ハ樂ニ碇泊スル事ガ出來ル。港外ノ珊瑚礁ノ間ニハ大艦隊碇泊ニ充分ナ程非當ニ廣イ碇泊場ガアル。シカク修繕ト補給ノ設備ハ充分ニ構築サレテキナイカラ同港ハ單ニ、寄港地トシテノミ價值ガアルノデアアル。

(三) 軍備

「濠洲聯邦政府ハ今此處ニ對日本防備トシテ空軍基地ヲ含ム軍港ヲ建設シテキル。

現地觀察ニヨリ獲得セル情報ハ左ノ如クデアル。

(イ) 守備隊兵力

「陸軍

ソノ大キサト設備ノ規模ヨリ判斷スレバ大約一千人ヲ收容シ得ル兵舎ガグランヴァイルイースト（市ノ北東約一軒）ニアル。現在ノ守備隊ハ砲兵隊ガナク、悉ク歩兵隊ヨリ構成サレテキルヤワニ思ハレル。

「ソノ他

「英國濠洲砲兵分遣隊（六吋砲ヲ持ツテ到着シタ二士官、三十八人ノ下士官及ビ兵卒）ハ明ラカニエラ山上ニ駐屯シテ居リ、山ノ上ノ兵舎ノ數ガ増加シツツアル事實ヨリ判斷スレバ、ソレハ増兵サレルデアラウ。

「海軍

「ソノ兵力ハ不詳デアルガ、約三十名位ト思ハレル。中隊事務室ハ官營埠頭ノ横ニアリ碇泊所ノ船名ハ判明シナイ。只二三隻ノ小蒸氣船ガ認めラレタニ過ギナイ。

(ロ) 設備

「軍用道路ガエラ山ノ頂上迄作ラレ、六吋砲二門ガ頂上ニ設置サレテアル。コノ大砲ノヨリ火艦ハ明ラ

Doc

カニバシリスグ水路へ向ケラレテキル。大砲ハ山ノ頂上ニ露出シテキル。報告ニ依レバ更ニ大砲二門ガ増加サレルテアラウ。ボートモレスビー東方約四軒ノキラキラ飛行場ノ外ボートモレスビーヨリ約十一軒ノ所(位置不詳)ニ軍用飛行場ガ建造サレル豫定デアアル。海岸邊ニ平行シテトワアグバ山ノ中腹ニ至ルマデノ一本道ガ建設サレツ、アル。

一九三九年ノ昭和十四年ノ十月ニ受ケ取ツタ報告ニ依レバボートモレスビーニ戰争勃發ノ際非戰國員ガ疎開シ待ル場所ヲ奥地ニ構集中デアアル。(ソノ場所ハ不詳デアアル。一日本人ハ官吏ニヨツテ嚴重監視サレテキル。現地人ノ日本へノ旅行ト日本船ノ入港トハ禁止サレテキル。

(四) 水道通過

一ボートモレスビーニ於ケル上陸作戦ノ最大困難ハ水路ノ通行デアラウ。ボートモレスビーノ港へ入ル水道ガ三ツアル。西端ノリルブラツド水路ハ流レガ非常ニ強クテ淺瀬ガアル。コノ水路ハ港口前ニ淺瀬ガアル爲ニ一般ニハ使用シ得ナイ。ソレ故ニコノ水路ニ入ルコトハ困難デアアル。中央ノバシリスタ水路ハ現在船舶ニヨツテ使用サレテキル水道デアアルガ、エラ山ニアル砲台カラ約六軒ノ距離ニ在リ從ツテ砲ノ有効射程内ニアアル。一般ニ砲台ガ破壊セラレザル

141

142  
限り、コノ水道ヨリ入ル事ハ困難チアラウ東端ノバ  
ダナ、ナフアハ十分廣ク（約九百米）砲台ノ有効射  
程外ニアル（約一萬八千米）。

コノ水道ヲ入港ノ爲ニハ築造スル必要ガアル。シカ  
シ乍ラ三ツノ水道ハ皆アマリ深クモナケレバ廣クモ  
ナク容易ニ機雷ソノ他ノ防禦物ヲ以テ蔽フ事ガ出来  
ル。コレラノ障害物ヲ先ヅ第一ニ除去シナケレバナ  
ラナイ。ナテアラ及ビシナビ珊瑚礁ヲボトデ通過  
シ得ル箇所ヲ發見シ得バ水道通過ノ危険ヲ犯サズニ  
接近ガ出来ルデアラウ。珊瑚礁ノ外デ碇泊スル事ハ、  
非常ニ困難デアルカラス、ル場合ニハ移乗ハ漂流中  
ニセヌバナラメデアラウ。

#### 一 食糧

一 各會社ノ冷蔵設備ノ中ニ貯ヘラレテアル肉量ノ少ナ  
イ。牛、豚、山羊ノ牧場ハアルガソノ數ハ不詳デア  
ル。鮮魚ハ豊富デアルガ野菜ハナイ。

#### 一 眞水

一 一般ニコノ地區ハ不毛ノ山嶽ヨリ成リ、毎年六月  
カラ一月ニ亘ル八ヶ月間ハ乾燥シテキル。降雨ハ非  
常ニ少ナイ。雨水ニ依存セル住民ハ時々ソノ生活ヲ  
維持スル爲他ノ地區カラ水ヲ運搬シナケレバナラナ  
イ。

政府ハ市ノ裏ノトウアグバ山ノ西北海拔百三十七米

ノ場所ニ、旱魃ノ際使用ノ爲トタン屋根ノ貯水タン  
 クラ建設シタ。ソシテコノ貯水ハ非常ノ際ニ使用サ  
 レル。ソノ容量ハ數萬噸トイハレルガ確定的デハナ  
 イ。飲料水ノ問題ハコノ地區ニ於テハ最モ緊急事デ  
 アツテ給水線ノ延長ハ港灣帯業ノ計畫ニ於テ殊ニ重  
 要デアル。停ヘラレルトコロニ依レバ、ラロキ川カ  
 ラ水ヲ引ク事ガ計畫中デアリ、ソノ準備ハ本年八月  
 頃完成セラレルテアラウトノ事デアル。

「燃料

「ガソリン、ドラム罐五千、重油三千ドラム罐大書  
 ノモーターオイルソノ他ガカーベンター倉庫ニ貯藏  
 サレテキルトノ事デアル、飛行機用ガソリン性質ハ  
 不映デアル。

「自動車」

「軍用——約五十

民間用——約二百（バスナシ）

「第三篇——對米英戰ノ場合ニ於ケル航空基地トシ  
 テノビスマルク諸島ト英領ニューギニアノ價值。

「一、要綱

「第一篇ニ説明シタル如クビスマルク諸島ハ我が南  
 洋委任統治諸島ノ大抵ノ島カラ作戦スル爆撃機ノ航  
 線距離内ニアル、更ニトレス海峡ト澳洲北部ハビス  
 マーク諸島ト英領ニューギニアカラノ航空圈内ニア

ル。而シテコノ地域ハ一般ニ對米英戰爭ノ際ニ航空  
作戰ノ觀點カラ重大ナル價值ヲ有スルモノト判斷セ  
ラレテキル。特ニトレス海峽ノ制空權ガ獲得セラレ  
タナラバ印度洋ハ勿論太平洋ト蘭印トノ敵ノ交通ヲ  
遮斷スルノニ有利デアルト思レル。

一コノ地區ニ於ケル飛行場ノ所有ニ關シテハ、第一  
原則ハ既設飛行場ヲ使用シ、要スレバ平坦地域ノ農  
場ニ飛行場ヲ新設スルコトデアル。

一既設飛行場ハ軍ノ要求ヲ充タスニハ完全ニ充分デ  
ハナイガ、ソレヲノ或モノハ即時ニ利用サレ得ルシ、  
少量ノ勞働力ヲ投ジテ擴張シ得ル。

一コノ地區ニ於テハ燃料獲得ハ困難デアルカラ一般  
ニソレハ後方ヨリ補給シナゲレバナラナイ。  
修理及ビ建築設備ノ多クハ不充分デアル。

一現在英領ニューギニア爾既設飛行場着陸場及ビ航  
空路網ノ狀態ハ附錄地圖第十號ニ示セル通りデアル。  
(地圖ハ添付セズ)

一ニ、ビスマルク諸島及ビソノ近傍ノ價值(附錄地  
圖第六號、參照番號第六號)(鹵獲セズ)

一(一)要項

一ビルマルク諸島及ビ近傍ニ於ケル既設飛行場ハラ  
バウルト、ヴナカナウニ於ケル二個ノ陸上機飛行場  
デアアル。ソシテカヴァーエ(ニューアイランド

145

北端、ナマタナイ、ブカ水路（ソロモン群島ノブ  
 ーゲンビルトブカ島ヲ分ツ海峡）及ビキエター（ブー  
 ゲンビルノ首府）ニ他ノ飛行場構築ヲ計畫中デアル。  
 ラバウルノ港ノ只一ツノ場所ガ水上機用デアルガ、  
 他ノ一ツハロロボ（ニューブリテンノ北東岸）ノ對  
 岸ガラワ島ノキレグニ在ル。航空機用ガソリンニ關  
 スル事情ガ不詳デアルガ殆ド全ク何等ノ貯蔵ナキ模  
 樣デアル。定期選航ノ飛行機ハ歸途サラマウア若ク  
 ハモレスビーニ於テ燃料補給ヲスル樣デアル。ラバウル  
 ニ航空機用ガソリンガ供給サレテキルトイフ報告ハ  
 ナイ。

一三、ニューギニア島ノ價值

（一）要項

一、ニューギニア島ニハ飛行場及ビ着陸場ガアル。ソ  
 ノ大部分ハモロベ地區ニ集中シテ在ル。ソレハ同地  
 區ニ開發セラレタル嶺山カラ金ヲ採送スル飛行機ニ  
 ヨツテ使用セラレテキルカラデアル。主トシテ陸上  
 機ニヨツテ使用セラレル飛行場ハ、サラマウア、マ  
 ウア、ラエ、ワウ、マタン、ウエツク、ポートモレ  
 スビー及ソノ他ニアル。サラマウア、トワウノ二飛  
 場ノミニ就イテ目下簡報ヲ有スル。上記資料ヨリ英  
 領ニューギニアノ飛行場ノ價值ヲ論ズル事ハ無益デ  
 アル。然シ乍ラ之等（サラマウア及ビラウノ二飛行

146

場)ハ定期航空會社ニヨリ利用セラレルモノノ代表的ナルモノデアラカラ、他ヲ評價スルニ使用スベキ確カナル參考資料デアルト信ズル。特別建設ヲ施サレタ水上機基地ハポートモレスビーノミニアルモノノ如クデアル。

(A T I S 書類第二七一二號未發表)



A146-A

(七〇四九一於)

# 濠洲軍配備要圖

極秘

10,000,000

治集團司令部



- ① 北部師団司令部 (北軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)
- ② 東部師団司令部 (東軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)
- ③ 南軍団司令部 (南軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)
- ④ 西軍団司令部 (西軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)
- ⑤ 西軍団司令部 (西軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)
- ⑥ 南軍団司令部 (南軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)
- ⑦ 西軍団司令部 (西軍団司令部)
  - 才一騎兵旅団 (才一騎兵旅団)
  - 才七歩兵旅団 (才七歩兵旅団)
  - 才十歩兵旅団 (才十歩兵旅団)
  - 濠洲砲兵隊 (濠洲砲兵隊)
  - 濠洲工兵隊 (濠洲工兵隊)
  - 濠洲通信隊 (濠洲通信隊)
  - 濠洲高射砲隊 (濠洲高射砲隊)
  - 勤務隊 (勤務隊)

卅五 濠洲ニ於ケル戦前ノ間諜行爲

イ濠洲軍ノ配置ヲ示セル略圖

一九四〇年ノ昭和十五年ノ七月迄ノ濠洲軍ノ配置ヲ示セル註釋附略圖ヲ第八圖トシテ複寫ス。同略圖ハ治(十六軍)集團司令部ニヨリ發行セラレタルモノノ如シ。

(A T I S 時學翻譯第二十一號 三十四頁)

治(十六陸軍)集團司令部ニ依ツテ一九四〇年(昭和十五年)發行セラレ濠洲軍ノ編制ヲ示メシテ居ル表ハ左ノ如ク書イテアル。

### 濠洲軍編制

濠洲軍司令部(メルボルン)

一六七六A 北部軍管區(ブリスベン)

第一軍團區(ブリスベン)

砲兵司令部(ケルピンググローヴ)

第五野戰砲兵聯隊

第十一野戰砲兵聯隊

### 濠洲軍砲兵

濠洲工兵隊(ケルピンググローヴ)

濠洲通信隊(ケルピンググローヴ)

勤務隊(ケルピンググローヴ)

第一騎兵旅團 (ブリスベン)

<sup>2</sup>/<sub>14</sub> 輕騎兵聯隊

第五輕騎兵聯隊

第十一輕騎兵聯隊

第七步兵旅團 (ブリスベン)

<sup>9</sup>/<sub>49</sub> 大隊

第一五大隊

第二五大隊

第四七大隊

第六一大隊

第十一步兵旅團 (タウンズヴィル)

第二六大隊

第三一大隊

第四二大隊

第五一大隊

第一守備大隊

東部軍管區 (シドニー)

第二軍團區 (シドニー)

第一野戰重砲兵聯隊

第一高射砲聯隊

第五重砲兵聯隊

濠洲戰車隊

濠洲測量隊

第一騎兵師團 (シドニー)

第二一野戰砲兵聯隊 (マリツクビル)

師團通信隊 (バジングトン)

師團勤務隊 (マリツクビル)

第二騎兵旅團 (アーミテル)

第一輕騎兵聯隊 (機關銃)

第六輕騎兵聯隊

第七輕騎兵聯隊

第十二輕騎兵聯隊

第二裝甲聯隊

第四騎兵旅團 (パツデングトン)

第一五輕騎兵聯隊

第一六輕騎兵聯隊 (機關銃)

第二一輕騎兵聯隊

第二四輕騎兵聯隊

第一師團 (シドニー)

砲兵隊司令部 (パツデングトン)

第一野戰砲兵聯隊

第七野戰砲兵聯隊

師團工兵隊 (クロースネツト)

師團通信隊 (クロースネツト)

師團勤務隊 (パツデングトン)

第一步兵旅團 (ニューカッスル)

第二大隊

第三三大隊

第四一大隊

第八步兵旅團（クローヌスト）

第一八六隊

第三〇大隊

第三五六隊

第三六六隊

第二師團（シドニー）

砲兵隊司令部（バツジングトン）

第九野戰砲兵聯隊

第一四野戰砲兵聯隊

第一九野戰砲兵聯隊

師團工兵隊（バツジングトン）

師團通信隊（バツジングトン）

師團勤務隊（マリツクビル）

第九砲兵旅團（マリツクビル）

第一大隊

第四大隊

第十七大隊

第四五六隊

第五步兵旅團（バラ・マツタ）

<sup>20</sup>/<sub>19</sub>大隊

第五四大隊

第五五六隊

第一四步兵旅團（バツジングトン）

151

第三大隊

第一三大隊

第三四大隊

$\frac{55}{3}$ 大 隊

シドニー大車大隊

第二守備大隊

第一一守備大隊

南部軍管區 (メルボルン)

第三軍團區 (メルボルン)

澳洲戰車隊

第二野戰重砲兵聯隊

第六重砲兵聯隊

第二騎兵師團 (メルボルン)

第二二野戰砲兵聯隊 (メルボルン)

師團通信隊 (メルボルン)

師團勤務隊 (メルボルン)

第三騎兵旅團 (メルボルン)

第十七輕騎兵聯隊 (機關銃)

第二〇輕騎兵聯隊

第二六輕騎兵聯隊 (機關銃)

第一裝甲聯隊

第五騎兵旅團 (メルボルン)

第四輕騎兵聯隊

第八輕騎兵聯隊

13<sup>19</sup>輕騎兵聯隊

第三師團 (メルボルン)

砲兵隊司令部 (メルボルン)

第二野戰砲兵聯隊

第四野戰砲兵聯隊

第八野戰砲兵聯隊

師團正兵隊 (メルボルン)

師團通信隊 (南メルボルン)

師團勤務隊 (南メルボルン)

第四步兵旅團 (メルボルン)

第一四大隊

第二二大隊

第二九大隊

第四六大隊

第一〇步兵旅團 (コールヒールド)

24<sup>39</sup>大 隊

第三七大隊

第五三大隊

第一五步兵旅團 (ヴァランスウイク)

57<sup>60</sup>大 隊

第五八大隊

第五九大隊

第四師團（メルボルン）

砲兵隊司令部（メルボルン）

第一〇野戰砲兵聯隊

第一五野戰砲兵聯隊

師團工兵隊（メルボルン）

師團通信隊（メルボルン）

師團勤務隊（南メルボルン）

第二步兵旅團（メルボルン）

第五大隊

第六大隊

第三二大隊

メルボルン大學大隊

第六步兵旅團（メルボルン）

第七大隊

第八大隊

第<sup>23</sup>/<sub>21</sub>大隊

第三八大隊

第三三守備隊

第一二守備隊

第四軍管區（アデレード）

第六騎兵旅團（ケスウツク）

第三輕騎兵聯隊

第一八輕騎兵聯隊



9/23 輕騎兵聯隊

第三步兵旅團（ケスウイク）

第一〇大隊

第二七大隊

第四三大隊

第四八大隊

第四守備大隊

濠洲重砲兵隊ノ一部

第一三野戰砲兵聯隊

第六軍團區（ホバート）

第二二輕騎兵聯隊

12/30 大隊

第四〇大隊

第六守備大隊

第六戰戰砲兵聯隊

濠洲重砲兵隊

濠洲高射砲隊

濠洲測量隊

西部軍管區（パース）

第五軍團區（パース）

第一三步兵旅團（パース）

第一一大隊

第一六大隊

- 第二八大隊
- 第四四大隊
- 第一〇守備大隊
- 第一〇輕騎兵聯隊
- 第二五輕騎兵聯隊（機關銃）
- 第三野戰砲兵聯隊
- 第七重砲兵聯隊

第七軍管區（ダーウン）

- ポートモレスビー防備隊（重砲兵）
- ダーウン機械化砲兵隊（重砲兵）
- 濠洲高射砲隊
- ニューギニヤ義勇兵聯隊

第六 朝鮮ニ於ケル防諜對策

一九四一年（昭和十六年）十二月八日以前ハ情報漏洩ヲ防止スル爲メノ注意ハ綿密周到ノモノデアツタ。一九四一年ハ昭和十六年）九月附ノ公文書ハ朝鮮第十九師團ガ他國人ニヨリ軍事上ノ重要ナ情報ガ取得サレナイ様ニ嚴重ナ注意ヲ拂ツタコトヲ示シテ居ル。

第十九師團幕僚ノ通達ニ基キ發セラレ第四十七野戰高射砲大隊入手ノ一九四一年九月作成ノ防諜規則ノ抜萃。

「命令ヲ持ツテキル間ニ採ルベキ方法  
第一號方鑑。

防諜並ニ各種ノ規則ニ關スル定期的漸進的變更指令ガ發セラル。敵領土ノ人民ヲシテ我方ノ種々ノ情報獲得ノ計畫ニハ參加セシメナイコト。同時ニ將兵ハ使用人モ一ヲシテ積極的意識ヲ喚起セシメ以ツテ各自テ敵ノ謀略ヲ粉碎無効ナラシムル様ニスルコト。斯クテ敵ノ目ヲ眩マシタリ我方ノ意圖ヲ陰蔽スルコトニヨリ我方ハ安心シテ軍事的準備ヲ行動ニ移スコトガ出來ル。

第二十一節一兵員ノ外國人殊ニ兵營外ニ居ル外國人ト接スル機會ヲ公用ノ場合ニ限ルコト、殊ニ語學、宗教ニ關シテ。

有害ナル行爲ヲ避ケ又ハ我方ノ意圖ノ暴露ヲ防止スル爲メニ英國人、亞米利加人、ロシヤ人ヤ更ニ獨逸人デモ多數居ル反ナチス派ニハ特ニ注意スルコト。

英國人ヤ亞米利加人トキリスト教信者ノ婦人ノ交際ヲ取締ルコト。

第二十二節一軍人ノ家族殊ニ其ノ子供ノ會話ニ注意シ軍ニ關係ヲ有スル事項ノ收得ヲ防止スルコト。地方官憲殊ニ學校當局ト協力シテ學生ノ爲ス根據ノ無い風評ヤ虛偽ノ報道ヲ取締リ其等ノ專柄ニ關シテハ彼等ヲ指導スルコト。

朝鮮人ノ各家庭ハ關係アル隊ノ指揮官ニ雇ハラレ  
テ居ル凡テノ鮮人ノ原籍等ヲ報告スルコト。  
官舎ノ構内ニ出入スル商人等ニ鮮人ノ監督調査ヲ  
嚴ニスルコト。

第三十八節 朝鮮各地方テ憲兵ヤ官公私立學校ト  
關係アル時ハ防諜指導ヲ勵行ノコト。

郵便局ヤ新聞人等ニ就テモ亦同ジ。

第五十四節 兵ノ防諜能力ヲ發達セシメ充分彼等  
ガ防諜上氣轉ヲ利カス様ニスルコト。彼等ガ鮮人  
等ニ接スル折ハ特ニ用心スルコトヲ期ス。(例ヘ  
バ兵隊ノ紙屑籠ヲ鮮人ガ検査スルコトアリ)

(A T I S 敵例出版物第十、第七、一一、一三及

第四章 軍事的意義ヲ有スル出版物

三十七、概 要

爾後ノ軍事行動ニ直接關係アル夥シイ數ニ達スル典範ヤ訓令等ガ戰爭勃發前一ケ年半ノ期間中ニ發刊サレタコトハ押收書類ノ調査ニ依ツテ明瞭ナル。通常ノ軍事的計畫ガコレヲ刊行物ノ大部分ノ刊行ノ基因ヲ爲シテ居ルト確ニ言ヒ得ル。然シナガラ多クノ場合之等刊行物ノ主題ハ日本ノ軍事的關心ノ趨勢ヲ證明スルニ役立つモノデアルガ二三ノ場合ニ於テハ發刊物ノ縮言トシテ載セラレタ公式聲明ハ危機ガ接近シツツアルコトヲ明カニ示シテキルモノデアル。發刊日附ノ年代順ニ列擧シタ關係出版物一覽表ヲ次ノ項ニ示ス。

三十八、出版物一覽表

(イ) 蘭領東印度兵要地誌  
受領シタル軍事秘密書類ノ表、一九四二年七月九日附、歩兵第四十二聯隊ニ屬スルモノニテ左ノ項目ヲ含ム

編輯日附

題 目

一九四〇年四月三十日	英領馬來兵要地誌及一般敘述
一九四〇年十一月一日	蘭領東印度兵要地誌
一九四〇年十一月一日	蘭領東印度兵要地誌 (別卷)
一九四一年八月三十日	英領ボルネオ兵要地誌及一般敘述
一九四二年十月十五日	英領馬來ノ資源

158

158

(聯合軍翻譯通譯部時事翻譯第四五番九頁)

(ロ) 「ボルネオ」及瓜哇地圖

一九四一年二月、陸軍陸地測量部參謀部發行ノ「ボルネオ」及瓜哇ノ航空地圖ノ斷片秘密ノ印アリ。

(聯合軍翻譯通譯部公報三一三號一頁)

(ハ) 熱地ニ於ケル給與

第五十五衛生隊所有膳寫版綴込

内 容

(一) 百三十二部隊作製 一九四一年三月十日附

熱帶地方ニ於ケル給與ニ關スル參考書類

(二) I 演習調査隊第四班作製 一九四一年六月附

熱帶地方ニ於ケル輸送船上ノ給與及衣類ニ關スル提言

(聯合軍翻譯通譯部公報一九二號一頁)

(ニ) 航空勤務員ノ急速訓練

一九四二年十月十日步兵第四十一聯隊秘密書類係將校ニヨリ收得シタル軍事秘密書類ノ索引表  
陸軍省作製

編輯日附 題 目

一九四一年四月十日 航空勤務員急速訓練ニ就テ

(聯合軍翻譯通譯部公報一四二號一頁)

(ホ) 日本ノ未來ノ寶庫

一九四一年四月三十日內閣印刷局發行「大東亞

159

ト太平洋」ト題スル色彩地圖、鉛筆ニテ「ニユ  
ーギニア」近傍ニ「日本ノ未來ノ資源、人口三  
十萬人」ト註解ガ附サレテアル。

(聯合軍翻譯通譯部公報二六一號二頁)

(ヘ) 「大東亞共榮圈ト太平洋」ノ印刷地圖

一九四一年四月三十日內閣印刷局ニテ情報局公  
報第二三八號ノ週報附録トシテ發行シタルモノ  
デ「禁複製」ト印シアル

(A T I S 公報第四五七號四頁)

(ト) 道路敷設地圖「海南島

一九四一年七月附、海南島ニ於ケル道路敷設地  
圖十枚、發行當局名明記ナシ

(A T I S 公報四三六號一六頁)

(チ) 英軍兵器便覽

一九四一年九月附、陸軍技術本部發行圖解附  
「英國兵器紹介」ト題スル印刷サレタ便覽

(A T I S 公報二〇一號二頁)

(リ) 軍事施設圖「シンガポール」

一九四一年九月發行、「東亞共榮圈、西部太平  
洋大地圖」ト題スル發行當局不詳ノ色彩地圖、  
コノ地圖ニハ世界地圖、「シンガポール」軍事  
施設略圖、瓜哇明細地圖、「ハワイ」群島明細  
地圖ヲ挿入シアリ。

(A T I S 公報二三四號一頁)

(又) 歩兵野戰築城教範

一九四一年九月發行、歩兵野戰築城教範第一篇  
緒言ニ左記ノ章句アリ

本書ハ野戰築城教範ノ改訂準備目的ノ爲ニ夜  
ニ於テ實驗シタルモノデアアル。尙改良ノ餘地  
ルヤモ知レヌガ現下ノ情勢ニ鑑ミ上同ノ承認ヲ  
得テ取敢ヘズ發行配布シタモノデアアル。

一九四一年九月陸軍歩兵學校長、仲永太郎(言  
譯)

(A T I S 敵側發刊物五〇號一頁)

(ル) 上陸作戰必携

一九四一年九月十八日附、陸軍教育總監部編輯  
「上陸作戰便覽參考書」ト題スルモノデアアルニ  
左ノ章句アリ

「本書ハ上陸作戰參考資料提供ノ爲ニ取敢ヘズ  
配布シタルモノデアアル」

(A T I S 敵側發刊物二五號一頁)

(ワ) 船長ニ對スル訓令

一九四一年九月三十日附、海軍省發行

船長ニ對スル戰時服務令、軍事秘密ト印シアリ  
一般訓令ニハ左ノ記述アリ

「本書ハ戰時中全日本人船長ノ遵守スベキ服務  
訓令ヲ示シタモノデアアル。平時ニ於テモ本書ハ

161



他國ノ敵對行爲ニ依リ脅威ノ感ヲ感ジタル場合  
ニ於テモ使用スルモノデアアル

(A T I S 公報一七二號一頁)

(ワ) 南方諸國ノ航空機

一九四一年九月參謀本部發行、一九四二年一月  
補修「南方諸國ニ於ケル航空機」ト題スル印刷  
小本デアアル

(A T I S 公報一四五號二頁)

(カ) 聯合軍飛行機ノ識別

一九四一年九月陸軍教育總監部發行  
「ソヴェト、アメリカ、英國飛行機ノ識別」ト  
題スル印刷小本

(A T I S 公報一四五號二頁)

(ヨ) 米軍戰術

一九四一年十月十日參謀本部發行、一九四二年  
十二月十八日第五十一師團作戰部ニヨリ複寫  
「米國陸軍戰術ニ關スル調査資料第七號、米國  
歩兵聯隊守勢配置ノ一範例」機密ノ印アリ

(A T I S 公報二五七號二頁)

(タ) 日語馬來語彙

一九四一年十月附、軍令部發行  
日本語ト馬來語ノ單語彙ヲ有スル印刷パンフレッ  
ト。

(A T I S 公報一〇二號十三頁)

(レ) 熱地衛生便覽

一九四一年十月附、海軍省醫務局編輯  
海軍省教育局發行「熱地衛生便覽」ト題スル小  
本

(A T I S 公報五三九號一四頁)

(ソ) 熱地醫療必携

一九四一年十一月附、東南亞細亞、馬來群島、  
太平洋ノ地圖ヲ掲載セル海軍醫務局編輯  
「熱地地方ニ於ケル簡易醫療必携」ト題スル印  
刷小本。

(A T I S 公報四一二號一四頁)

## 第五章 結論

一 一九四一年十月末ニハ日本帝國政府、アメリカ合衆國、英帝國、及比利時ニ對シ、戰端ヲ開ク事ニ當然決定シタノデアアル。當時、大本營陸軍部ト海軍部ハ協同ニテ「陸海軍中央協定」ヲ發シタ。コレハ、陸海協同作戰ガ直面スルアラユル場合ノ兩者ノ關聯的命令、管轄地域、任務及ビ責任ヲ明示セル基本的文書デアツタ様デアアル。

二 一九四一年十月末ニ日本ノ米國、英國及ビ和蘭ニ對スル攻撃開始ノ結果ソヴイエットモ又日本ニ對シ、攻撃ヲ行フ可能性ニ就イテ、當局ノ考察ガナサレタ。コノ問題ハ日本ノ方カラソヴイエットヲ攻撃セ又限り起リ得又事ト斷定サレタガ、防禦態勢ガ明示サレタ。

三 攻撃ヲ正式ニ決定シタ日付ヲ、更ニ精確ニ證明スルニハ、現在ノ證據ニテハ不十分デアアル。併シナガラ眞珠灣攻撃計畫ハ、一九四一年九月二日ヨリ十三日ニ至ル東京ニ於ケル海軍圖上演習ノ折、イヨイヨ決定サレ、コレラノ計畫ノ本質ハ、一九四一年ノ昭和十六年ノ九月三日ニ發セラレタル演習施行ノ方針ヲ規定セル條件ノ概要ニ具体化サレテ居タ事ハ注目ニ値スル。最初ノ反部分的計畫ハ疑モナクソレ以前ニ遡ツテ爲サレテキタラシイ。小特殊潛航艇隊ハ眞珠

165

灣攻撃ニ先立ツ一年半ノ間吳軍港ニ於イテ研究シ訓練ヲ行ツテキタト一資料ガ示シテキル。一九四一年九月十五日ニハ、來ルベキ作戰ニ關スル諸問題ニ就イテノ陸海合同ノ協議會ヲ岩國ニ於テ開催スル事ヲ必要トスル程準備ハ進行シテキタ。一九四一年九月十五日ヨリ十月末迄ノ期間ハ大体「陸海軍中央協定」ノ詳細事項ヲ圓滑化スル爲ニ費サレタト推定スルモ正當デアラウ。

四一九四一年十一月一日ニハ戰鬪開始ニ伴フ海軍ノアラユル活動ノ基本的計畫ガ決定セラレタ。コレハ佐伯灣ニ碇泊セル山本海軍大將ノ旗艦「長門」艦上ニ於ケル一九四一年十一月一日付ノ機密聯合艦隊命令作第一號ニ具體的ニ表現サレタ。コノ書類ハ、一九四一年十一月一日以前ニ、相當ナ軍備ノアツタ事ヲ舉ゲテキル事ハ注目ニ値スル。ソレニハ「第四艦隊ハ、大体南洋委任統治諸島ニ展開ヲ完了シ、同様ニ第十一航空艦隊モ支那・佛印・タイニアル重要航空基地ニ於テ準備ヲ完了セリ」ト述ベテアル。

五一九四一年十一月五日迄ニハ上述ノ機密作戰命令第一號ヲ、「Y日」トシテ指定サレタ、一九四一年十一月廿三日ニ有效ナラシメルコトニ決定サレタ。コノ決定ハ十一月五日發出ノ機密聯合艦隊命令作第二號ニ具現サレタ。

六 正式ノ戦争布告ノ日時ハ一九四一年十一月十日ニ至ル迄發表サレナカツタ。ソノ日ニ機密聯合艦隊命令作第三號ガ發セラレタ。ソレニハ「×日ハ十二月八日トス」ト述ベテアツタ。

七 日本軍當局ハ今次戦争ニ對スル準備ノ或部分ニ於イテハ先見ノ明ヲ持チ徹底的デアツタ。撰リ拔キノ部隊ニ、ジャングル戰ヤ水陸兩面行動ノ特別訓練ヲ與ヘ、スパイヲ探偵ト調査ノ爲將來ノ作戰地帯ヘ派遣シ、重要地域ノ地圖ヲ豫メ作成シ、士氣昂揚、訓練指導刊行物ヲ書キ各部隊ニ配布シ、熱帶地用配給品ヲ裝備サレタ特別攻撃部隊ヲ組織シ最大ノ秘密ヲ保證シ得ル注意深ク選定サレタ地域ニ派遣シソシテ必要ナル輸送船ト護衛ヲ用意シタ。

附録 A

日本ノ戦争準備ニ關スル日誌

一九四一年十月十日—十二月七日

日時	資料		摘要
	種類	部隊	
一九四一年十月十日	狀況報告	第四十二砲 泊地集團	十月十日大阪出發、同十六日日 的地パラオ到着。砲泊場司令部 設置、其ノ後大東亞戦争ヲ伴フ 處ノ上陸作戰ノ準備ヲ爲シタ。
一九四一年十月十二日	一個人ノ 経歴書	第四十一歩 兵聯隊	一九四一年十月十二日ヨリ十一 月十六日マデ上海附近デマレ 作戰ノ準備ヲシタ。
一九四一年十一月一日	作戰命令	聯合艦隊	眞珠灣及英・米・和蘭領域ニ對 スル攻撃ヲ明示セル基本命令
一九四一年十一月四日	日記	第四十一歩 兵聯隊	豫期スル戦種ノ爲シヤングル戦 ノ訓練
一九四一年十一月十日	士氣昂揚 發刊物	第五十五歩 兵師團	第五十五歩兵師團ノ入手シタ「本 營ヲ讀メバ戦ハ勝ツ」ノ一冊
一九四一年十一月十三日	日記	第四十一歩 兵聯隊	食糧及ビ熱帯戦ノ必需品ヲ受ケ タ。(藥品、衣類等)
一九四一年十一月十四日	日記	南海派遣隊 第四十七高 射砲大隊	遂ニ前線へ出動命令受ク、 午前九時練兵場ニテ最後ノ送別 式ヲ舉行。前線へ出發直前淵山 (音譯)指揮官ハ訓辭ヲ行ヒ官 城ニ對スル宣誓文ヲ讀ンダ。我 ガ命ヲ捧ゲ戦死スル事ハ何等躊 躇シナイ。護國神社へ行キ、最 後ノ勝利ヲ祈願シタ。十九時 十九時汽車ニ乗ル。 釜山ニ向ケ出發。
	日記	南海派遣隊	

151

附錄 A

日附	種類		部隊	摘要
	種類	部		
一九四一年 ／昭和十六 年十一月 十五日	士氣昂揚 發刊物	南海派遣隊		堀井富太郎少將ノ名ニ 於テ配布サレタ「南海 ニ於ケル將兵ニ對スル 訓示」ト題スル小冊子
	俘虜J A 一四七九八七			第十八驅逐隊ト共ニ驅 逐艦「霞」ニ乗ツテ横 須賀ヲ去ル
	俘虜J A 一〇〇〇三七			航空母艦「加賀」ハ佐 世保ヲ去ツタ。九州ノ 南ヲ進ミ、更ニ日本ノ 東海岸ヲ進ンダ
一九四一年 ／昭和十六 年十一月 十六日	手帳	重巡洋艦 「加古」 ノ高橋大 佐ノ演説		「三年間、諸氏ハ自分 ノ職務ヲ熱心ニ勉強シ タ、ソシテ今諸氏ハ、 此ノ戦線ニ立ち、差迫 ツタ戦國ヲ感知シ、感 極マツテ居ルト信ズ、 情勢ハ確カニ最高潮ニ 達シヤウトシテ居ル。 實ニ其ノ最モ重大ナ段 階ニ到達シテイル。私

169  
169

<p>一九四一年 ／昭和十六 年／十一月 十七日</p> <p>日記</p>	<p>第四十一 步兵聯隊</p>	<p>ハ諸氏ノ非凡ナル決斷 カト努力トヲ熱望スル モノデアアル」</p> <p>「今日、自分達ハ全員 参加ノ上戦地ニ行クタ メニ閱兵式ト儀式ヲ行 ツタ」</p> <p>「六時ニ、自分達ハ遂 ニ釜山驛ニ着イタ」</p>
<p>一九四一年 ／昭和十六 年／十一月 十八日</p> <p>日記</p>	<p>第四十一 步兵聯隊</p>	<p>「龍城丸ニ乗ツテ、上 海ヲ去ツタ。遂ニ 命令ガ來タ。自分達ノ 活動ヲ發揮スル時ガ遂 ニ來タ。自分達ハA、 BトDト戦争ヲスルノ ダラウカ？」</p> <p>「十時カラ歩兵團ハ堀 井富太郎少將ノ下ニ演 習ヲ行ツタ」</p> <p>「釜山ヲ出帆シタ」</p>



170

170

Doc 1628

一九四一年 / 昭和十六 年 / 十一月 十九日	日記	南海派遣隊	艦船ニ火砲ヲ積載シ、 釜山カラ出帆シタ
一九四一年 / 昭和十六 年 / 十一月 二十日	日記	第四十一 歩兵聯隊	海南島ノ海口岸邊沖ニ 投錨スル
俘虜一古 川	日記	第四步兵聯 隊	「大分カラ航空母艦「シ ヨコク」ガ出帆シタ」 「青葉山丸デ吳淞ニ向 ツテ進ム」
日記	日記	南海派遣隊	七時ニ問司港ニ入ル (釜山カラ)。宇品港 デ隊長ノ高橋少尉ト分 レタ、松江丸ニ火砲ヲ 積載シタ

一九四一年  
昭和三十六年  
十一月二十一日

日記

第四十一  
歩兵聯隊

高雄ノ見エル所デ投録  
シタ（龍城丸デ）

日記

第四十四  
歩兵聯隊

「先發部隊ハ朝出發シ  
タ。軍旗ヲ預ツテ居ル  
部隊長ハ一時近クニ出  
發シタ」

日記

第四十一  
歩兵聯隊

「南洋ニ向ケテ吳淞ヲ  
出發」

日記

第四十四  
聯隊

一時四十分ニ坂出驛ニ  
到着シタ。第九中隊ト  
門司丸ニ乗船スル。」

日記

第四十四  
歩兵聯隊

「碇泊場司令部デ命令  
ヲ受ケタ。門司丸ノ内  
部ヲ觀察シタ」

一九四一年  
昭和三十六年  
十一月二十二日

俘虜J A  
1000三七

第四十一  
歩兵聯隊

上海ノ近クデ馬來作戦  
ノ演習ヲシタ後、上海、  
吳淞ヲ出發。」  
「艦「比叻」ト「霧島」  
ト航空母艦ノ「赤城」  
ト「飛龍」ガ單冠ニ到  
着シタ。」

171 171

172 172

1625

<p>一九四一年 ／昭和十六 年／十一月 二十三日</p>	<p>一九四一年 ／昭和十六 年／十一月 二十二日</p>	<p>日記</p>	<p>日記</p>	<p>日記</p>	<p>日記</p>	<p>日記</p>	<p>日記</p>				
<p>百四十四 步兵聯隊</p>	<p>田中分遣隊</p>	<p>南海派遣隊</p>	<p>南海派遣隊 高森部隊</p>	<p>南海派遣隊</p>	<p>南海派遣隊</p>	<p>「十九時五十分ニ朝倉驛ヲ出發、五時近クニ</p>	<p>「馬公ニ向ケテ田中分遣隊ハ乗船シタ」</p>	<p>「坂出ニ向ケテ善通寺ヲ出發。十九時三十分ニ坂出港ヲ出發。」</p>	<p>「大阪カラ出帆シタ」</p>	<p>「十三時ニ坂出デ乗船スル、夜、拔錨スル」</p>	<p>坂出ヲ出發。十時チエリボン丸ノ巡視始メル」</p>

俘虜丁A  
1000三七

日記

南海派遣隊

坂出ニ到着シタ

「航空母艦「加賀」が  
香港ニ到着シタ」

「坂出ヲ出帆」

日記

南海派遣隊

「大阪灣ニ自分達ハ投  
錨シタ様ニ思ハレタ。  
夜、拔錨シタ。(コノ  
日記ノ筆者ハ十一月二  
十二日坂出ヲ出發)

日記

南海派遣隊

五時近クニ、自分達ノ  
船ハ止ツタ、自分ノ友  
達ハ專修寺ダト言フ。  
(コノ日記ノ筆者ハ坂  
出ヲ十一月二十二日ニ  
出發)

日記

南海派遣隊  
第四十七高  
射砲大隊

「六時ニ坂出ニ到着シ  
タ。」(宇品カラ、多  
分松江丸デ)「十七時  
三十分ニ自分達ハ坂出  
ヲ出發シタ。自分達ハ  
何處ニ行クカ知ラ無イ」

日記	手帳	日記	日記	日記	日記	日記
第六陸上 勤務中隊	第四百四十四 歩兵聯隊	南海派遣隊	南海派遣隊	第四百四十四 歩兵聯隊	第四百四十四 歩兵聯隊	第四百四十四 歩兵聯隊
「輸送船「床川丸」デ 出帆シタ」(西貢カラ)	坂出港デチエリボン丸 ニ乗船スル。	「夕方、坂出ヲ出帆。 (多分、松江丸デ)	「十四時近クニチエリ ボン丸デ坂出ヲ出發」	「チエリボン丸デ坂出 ヲ出發」	大阪港ニ入ル、此所デ、 總テノ用意ヲ整ヘ、遂 ニ、自企建ノ目的地ニ 向ケテ出發シタ。警戒 ヲスル様ニト命令ヲ受 ケタ。」	「大阪沖ニ到着、其 ノ夜、出帆シタ」

175 175

1600

一九四一年  
昭和十六  
年十一月  
二十四日

日記	俘虜 J A 1000三七	日記	日記	日記	日記
第四十四 歩兵聯隊		船積不詳 結乗組 二等水兵	南海派遣隊	南海派遣隊	南海派遣隊
「松江丸ニ乗ツテ坂出 ヲ出帆」	航空母艦「蒼龍」ガ香 港ニ到着シタ。	「十四時ニ出帆シタ。 自分達ハトラツク島へ 向ケテ南へ直航スルサ ウダ、大抵ノ 場合ニ欠ケテ居タ真剣 ナ氣分ガ、特ニ、此ノ 航海デハ横溢シテ居ル。 電報爲替ニヨル送金十 圓ヲ受ケ取ツタ。自分 達ハ長期間、給料ヲ受 ケラレナイト思フ」	「丸龜ヲ去ツテ松江丸 ニ乗船シタ。十八時ニ 出帆シタ」	「坂出デ日本郵船會社 ノ大福丸ニ乗船シタ」	「紀州港ヲ通過シ、斗

日記	日記	日記	註
佐世保海軍 第五特別陸 戦隊	部隊不明	第四十一 歩兵聯隊	
「十時ニバラオニ向ケ テ出發シタ」	「海南島ノ海口ニ到着 シタ」	「海南島ノ最北端ニ到 着シタ」(吳淞カラ)	南ノ音譯ノニ向ツタハ コノ日記ノ筆者ハ大阪 ヲ十一月二十二日ニ出 發シタ

1625

一九四一年  
昭和十六年  
十一月廿五日

俘虜JA  
100037

俘虜  
古川

日記

第一百六

陸上勤務中隊

航空母艦瑞鶴ト翔鶴ガ  
單冠ニ到着シタ。  
航空母艦翔鶴ガ單冠灣  
ニ到着シタ。  
戦艦霧島、榛名、航空  
母艦加賀、赤城、飛龍、  
瑞鶴ト二三ノ巡洋艦及  
ビ若干ノ驅逐艦ガ既ニ  
其處ニ居タ。

「海南島」ノサマニ到  
着シタ」(西貢カラト  
コ丸)デ「樫井ノ音譯ノ  
丸ニ乗換ヘタ」

日記

佐世保海軍  
第五特別隊  
戦隊

二十時ニバラオヘ行ク途  
途中テ、自分達ハ進路  
ヲ變ヘテ、直接、海南  
島ノサマニ行ク様ニ命  
令サレタ。

田中分遣隊

田中分遣隊ハ第十四軍  
ノ司令官本間雅晴中將  
ノ直接指揮ノ下ニ入ル。

一九四一年  
昭和十六年  
十一月廿六日

#77

1077



演説二十九

第六艦隊所屬  
輕巡洋艦香取  
艦長

「野村、來福兩大使ノ戰  
 争ヲ未然ニ防グ努力ニ  
 モ拘ラズ、平和解決ノ  
 曙光ヲ見出スコトハ出  
 來ナイト思フ、結局武  
 力ヲ行使シナケレバ成  
 行キヲ解決スル道ハ無  
 イ。此ノ時ニ際シテ第  
 六艦隊所屬ノ香取ノ我  
 々ハ艦隊ノ配備ニツカ  
 シトシテ居ル。潜水艦  
 部隊ノミナラズ、空軍  
 ト水上部隊モ動員サレ  
 テ居ル。作戰ガ開始サ  
 レルノモ間モナイデア  
 ラウ。一昨日出航シタ  
 時ハ普通ノ航海デハナ  
 ク益ク速ツタモノデア  
 ツタ事ヲ諸氏ニ理解シ  
 テモラヒ度イ。今予ハ  
 諸氏ガ我々ニトツテ一  
 生ニ一度シカ來ナイ機  
 會ニ直面シテイル事ヲ  
 念頭ニ置イテモラヒ度  
 イ」

179 179

1621

一九四一年  
昭和十六年  
十二月二十七日

日記	日記	日記	地圖	俘虜JA 1000三七 俘虜市川	日記
第四十四 歩兵聯隊	南海派遣隊	南海派遣隊	公式地圖ハ機動部隊ノ千島列島ノ櫻提島、單冠灣カラノ出發ヲ一九四一年ノ昭和十六年ノ十一月二十七日ノト定メテ居ル。	「機動部隊ハ單冠灣ヲ去ツタ」 「機動部隊ハアリユーション洋島ノ南ノ北方路ヲ取ツテ單冠灣ヲ出帆シタ」	南海派遣隊
「自分達ノ戰線ハガム島ニナルデアラウ。：：：朝自分ハ甲板ニ行キ、輸送船ヲ右、左ト後ニ見タ」	驅逐艦卯月ガ自分達ノ輸送船團ヲ護衛シテ居ル」 （コノ日記ノ筆者ハ大福丸ニ乘ツテ居ル）	「小笠原諸島ノ一島ニ上陸シタ」 （コノ日記ノ筆者ハ十一月二十二日ニ大阪カラ出帆シタ。）	「母島ニ到着シタ」		

日記	日記	日記	日記
南海派遣隊	南海派遣隊	南海派遣隊	步兵聯隊 第四百十四
「父島ニ到着シタ」	「ツチ島（原文通り）ニ入港シタ、母島ヲ去ツタ」	「小笠原諸島ノ母島ニ上陸シ、軍馬ヲ下シタ」（コノ日記ノ筆者ハ十一月二十二日ニ大阪ヲ去ツテ十一月二十六日ニ小笠原諸島ニ上陸シタ）	「父島ニ到着シタ」
<p>（大阪カラ）「同日ノ正午前ニ母島ニ到着シタ。此等ノ島ニハ余リ人ガ住ンデ居ナイ。艦船ガ續イテ入ツテ來ル灣ハ大キイ艦船デ一杯ダ。此所ニハ七、八隻ノ軍艦ガ入ツテイル様ダ。初メハ此等ノ軍艦ニ一卯月、夕月、菊月トイフ風ニ名前ガツイテイタガ、名前ハ、後ニ取り除カレタ。此ノ艦送船ハ煙突ニMKト</p>			

日記	日記	日記	日記
第四百十四 歩兵聯隊	佛領印度支 那派遣軍ノ 第一〇六陸 上勤務中隊	第四百十四	歩兵聯隊 南海派遣隊
<p>書イテアツタガ、此レ モ取り去ラレタ。…… 十二月四日迄、暇潰シ ニ自分達ハ釣ヲシタ…… 思フニ、自分達ハ又暑 イ所ニ向ケテ行クラシ イ。自分達ノタメニ蚊 帳ト飯盒ガ用意サレタ」</p>	<p>「八時近クニ母島ニ到 着シタ。機送船ガ次カ ラ次ト集合シタ。自分 達ハ艦船カラ短艇ニ移 ル練習ヲシタ」</p>	<p>「十四時近クニ西貢ニ 到着シタ」(多分大海 丸デ)</p>	<p>「母島ニ到着シタ」 (チエリボン丸デ) 「自分達ハ軍艦卯月ニ 護衛サレタ」 (コノ日記ノ筆者ハ多 分松江丸テ坂出カラ母 島ヘ向ツテ居ツタラン</p>

一九四一年  
昭和十六年  
十二月二十八日

手帳	日記	日記	俘虜 JOSSA A	日記
第四百四十四 歩兵聯隊	部隊不明	第四百四十四 歩兵聯隊		艦種不詳ノ 艦船乗組ノ 二等水兵
「小笠原諸島ノ母島ニ止 ツタ」(チェリボン丸デ)	「海口ヲ去ツタ」	「十六時五十分ニ母島ニ 到着シタ」(松江丸デ)	「航空母艦加賀ハ第二番 液配備ニ就イタレ」	一九四一年ノ昭和十六年 ノ十二月二日ニ次ノ如ク 記入シテアル「...今日 ハ準備ノ五日目テ、配備 ガ完了シタ。 六日目ニ海軍モ同時ニ總 攻撃ニ参加スルトイフ風 説ガアル。コンナ事ガ實 際ニアリ得ルドラウカ? ...」
「海南島ノサマ沖テ集合 中、九州丸カラ病院船ニ 移サレタ」	一等兵ノ第四十一 履歴書 歩兵聯隊			

一九四一年  
昭和十六年  
十二月二十九日

作戦命令 第二號	崎川隊(第五 十五輜重聯 隊第二中隊)	「分遣隊ハグアム島ヲ攻 撃スル」
日記	南海派遣隊	「小笠原諸島ニ到着シタ」 (多分松江丸デ)
日記	第四百十四 歩兵聯隊	「特殊器具ノ操作方法ヲ 訓練シタ」(母島デ)
日記	南海派遣隊 第四十七高 射砲大隊	「十六時三十分ニ自分達 ハ艦船ノ東北ニ大キナ島 ヲ見ツケタ。自分達ヨリ 先ニ行ツタ若干ノ艦船ハ 此ノ島母島ニ居タ(坂出 カラ松江丸デ)
日記	南海派遣隊	「母島テ止ツタ」(松江 丸デ)
日記	南海派遣隊	「横濱丸ハ母島ニ居ル」 「父島カラ母島ニ到着シ タ」
日記	南海派遣隊	「父島カラ母島ニ到着シ タ」
日記	南海派遣隊	「母島(原文通り)カラ母 島へ到着シタ」

<p>一九四一年 昭和十六年 十二月三十日</p>	<p>日記</p>	<p>海軍特別隊 戰隊ノ吉本 隊</p>	<p>「宇品テ霧島丸三乗船シ タ。驅逐艦三十六號ト三 十七號ガ護衛シタ。バラ ホニ向ツタ」 「虎門ニ到着シタ」 （海口カラ）</p>
<p>一九四一年 昭和十六年 十二月一日</p>	<p>日記</p>	<p>第四十四 歩兵聯隊</p>	<p>「母島テ演習トヒ陸作戦 訓練ヲシタ」</p>
<p>一九四 一年 昭和十 六年 十二月 一日ノ 射擊計 畫</p>	<p>第四十八野 戰高射砲大 隊</p>	<p>「空襲ニ對シ大隊ハ基隆 陸軍防空隊ト協力スル。 全部隊ハ出來ル丈港外テ 敵ノ飛行機ヲ擊破スル様 ニ努力シ以テ基隆鐵砲地 ヲ防護スル」</p>	
<p>日記</p>	<p>第四百十四 歩兵聯隊</p>	<p>「父島テ上陸ヲ演習シタ」</p>	

一九四一年	日誌	佛印派遣隊	「午前、海南島ニ安着」
昭和十六年／十二月一日	日誌	第一〇六地上勤務	（恐ラクハ、大海丸（音譯）ニテ西貢カラ）
一九四一年	日誌	中隊	「拔鉛、」
一九四一年	日誌	步兵第四一聯隊	「サマ」ニ向ヒ再航。」
昭和十六年／十二月二日	發表	空母加賀艦長岡田大佐	（海口カラ）聯合艦隊司令長官ハ、天皇陛下ニ召サレ、十二月八日ヲ期シ米國ニ對シ宣戰ヲ布生スル旨御旨ゲアリト乘組員ニ對シ發表。加賀ハ、目下右陸ニ向ヒ進行中。
一九四一年	日誌	南海派遣隊	「二〇、〇〇時ヨリ鋪泊地浸透訓練ヲ受ケタリ」
一九四一年	日誌	南海派遣隊	一九四一年十二月四日母島ニテ、記サレタ日誌ニテ次ノ如ク記入サレテ居ル即チ「南海派遣隊長堀井富太郎（音譯）命令」
一九四一年	日誌	南海派遣隊	十二月二日、天皇陛下ニハ、英、米、露ニ對スル



一九四一年  
／昭和十六年／  
十二月三日

日誌	日誌	日誌	日誌	日誌
海軍第一特別 陸隊、吉本 (音譯) 隊	南海派遣隊	歩兵第一四四 隊	部隊名不明	南海派遣隊
宣戰布告ヲ裁決セラル。日本帝國ハ、十二月八日ヲ期シテ、米國ニ對シ、最初ノ空軍攻撃ヲ實施ス。當派遣隊ハ、特別命令ナケレバグアム島ニ上陸ス。無線通信ニテ、米國艦隊(五隻)ガ出港シタ事ヲ聞ク、又當隊ハ「バラヲ」ニ待機シタル後、フイリツピン群島ニ上陸スル事ニナツテ居ル事ヲ知ツタ。」	「ベニス丸ニ歸還」(母島ニ於テ)	「午後巡洋艦四隻入港各隊概シテ、士氣旺盛」(母島ニテ)	「アメン」出發「サマ」ニ向フ)	「日米會談ハ、遂ニハ決裂スルモノト思ハレル。」

日誌 南海派遣隊

「大隊附將校ハ、〇九、〇〇時ヨリ横濱丸上ニテ會合スル。煙幕並ニ瓦斯訓練。中隊長會議ニテ、イリヤ灣上陸ト決シタ。

一等巡洋艦二隻碇泊地ニ來テ我々ヲ護衛スル。心強イ。」(母島ニテ誌ス)

作戰命令第七七飛行聯隊  
A-122

「第二飛行中隊ハ、第七〇飛行場中隊ニ共同シ、

「サマ」ノ防空ニ任ズベシ。敵對行動ニ出ヅル航空機ハ、之ヲ撃墜スベシ。」

日誌

步兵第一四四聯隊

「出發準備完了。巡洋艦四隻並ニ掃海艇一隻入港」

(母島ニテ誌ス)

日誌

倭印派遣軍

「一六・〇〇時迄大海丸(音譯)

第一〇六地上

ニ殘留シ、香椎丸ニ乘リ

勤務中隊

替ヘタ。」

中隊

(海南ニテ誌ス)

一九四一年  
昭和十六年  
十二月三日

一九四一年  
昭和十六年  
十二月 四日

日誌

歩兵第四四聯隊

停務古川

日誌

南海派遣隊

「母島ヲ出發シ、南東ニ  
 進行。宣戰布告ノ命令接  
 受。我が隊ハ、十日ノ内  
 ニ×ニ上陸スルト思フ。」  
 「空母翔鶴ノ艦長ハ、乗  
 組員ニ對シ計畫サレテ居  
 ル攻撃ニツイテ通告シ免  
 「八時半、宮城遙拜。萬  
 歳三唱。訓辭ガアツタ。  
 日米開戦。今日迄、忍ン  
 デ來タ艱難ハ、今こそ酬  
 へレルノダ。我々ハ、昭和  
 聖代ノ爲ニ生ヲ享ケタ。  
 之ニ復ル喜ハナイ。護送  
 船四ハ、〇・九〇〇時出  
 航スル。サラバ、祖國ヨ  
 榮アレ。」  
 一四。二二時、南母島ニ  
 テ。「帝國ハ、米、英、  
 諸國ニ對シ戰端ヲ開ク  
 ニ決ス。南方方面軍ハ、  
 一九四一年十二月八日、  
 攻撃開始後、速カニ、フ

戰況報告	ト題スル	「泰作戦第七七飛行聯隊	日誌	南海派遣隊	日誌	南海派遣隊	<p>イリツピン・英領馬來、及ビ          露領印度ニ於ケル樞要地域          ヲ奪守セントス。之ガ爲、          日本ノ對米第一次空軍攻撃          ヲ實施ス。南海派遣隊ハ、          第四艦隊ニ協力シテ、グア          ム島ヲ奪取スベシ。別命ナ          ケレバ、十二月十日ニ上陸          スルモノトス。」堀井・作          戦命令。A第十七「各隊ハ          先ノA第七命令ニ基キ行動          スベシ。」</p>
	<p>「一九四一年ノ昭和十六年          十二月四日ヨリ七日迄ノ          第二五陸軍輸送船團ノ保護          並ニ、泰國占領準備。」</p>	<p>「米領グアム島奪取ノ目的テ、          母島ヲ出發。同日、日本ハ          十二月八日ヲ期シ英・米・          佛三國ニ對シ宣戦スルコト          ニ決シタ。」</p>	<p>「護送船團ハ〇九・〇〇時          ニ出發。」(母島カラ)</p>				

日誌	南海派遣隊	「グアム島ニ向ヒ出發スル ダラウ。然シグアム島ハ大 宮島ト呼稱サレル。」
日誌	高森隊	「一〇・〇〇時、目的地ガ アム島ニ向ヒ出發。」（母 島ニテ誌ス）
日誌	南海派遣隊	「〇九、三〇時、遂ニ島 （母島）ヲ出發。
日誌	第四七高射砲 大隊	直チニ、砲臺準備ヲ開始シ タ。」
日誌	步兵第四一聯 隊	「サマ」ヲ出發、海軍護衛ノ隊 送船四二八隻ハ、「シンガ ポール」ニ向ケ進航。」 （海軍カラ）
日誌	步兵第一四四 聯隊	「母島港テ待機 <sup>中</sup> ノ軍艦、並ニ 送船ハ、夫ノ目的地ニ向 出航シタ。」
日誌	步兵第一四四 聯隊	「〇九、三〇時、母島カニ 發。」
日誌	佛印派遣軍 第一〇六地上 勤務中隊	「〇六、〇〇時目的地ニ向 出發」（海南島テ、香椎丸船 中テ誌ス）
日誌	步兵第一四四 聯隊	「母島出發」
日誌	南海派遣隊	「母島出發」

一九四一年  
昭和十六年  
十二月五日

日誌	南海派遣隊	〇九・〇〇時、小笠原島に出發。
十二月四日附作戦砲大隊	命令	「多分「ルソン」島に對スル、來ルベキ上陸作戰中ノ空防禦ニ關スル指令。」 (基隆ニテ、モントリオール丸船中デ誌ス。) 「サマ」到着 (「フネン」カミ「〇八、〇〇時「サマ」到着)
俘虜福川	特別陸戰隊	「機動部隊ハ、布陸ニヒ進路ヲ南ニ轉ジタ。」
日誌	パラオ第三防備隊	「第三基地隊長ヨリ今日カラ第三警戒配備ニツ、様筆記命令ヲ受ク。事ハ愈々重大ニナツテ來ル。「パラオ」到着 (日記、筆者ハ、一九四一年ノ和十六年ノ十一月卅日島丸ニ乗船、宇品ヲ出シタ)
日誌	海軍第一特別陸戰隊吉本(音譯)隊	

一九四一年  
 昭和十六年  
 十二月 六日

日誌	南海派遣隊	「一〇、〇〇時（母島カ） 出發。無事巡航シテ居ル 「輸送船三十隻ハ、海軍護衛ノ下 ニ、作戦地域ニ向ヒ進行 シタ。」（「サマ」ニテ 誌ス。） 作戦上「〇四、〇〇時（サマ） 出港。」
日誌	高森隊（音譯） 第一〇六地上 勤務 中隊	「我等ノ使命ハ、米國ヲ攻 撃スルコトデアル。（グ アム島ニ進航中誌ス） 「米國機ハ我ガ陣地ヲ偵 シテ居ルトノ事デアル由。 「敵潜水艦発見、距離五千 米。」 （「バラオ」ニテ） 「明日、グアム島ヲ攻撃 占領スルトノコトデアル。 「輸送船團ハグアムニ向ヒ航行 テ居ル。明石（音譯）艦長 各隊長ニ命令ガ發セラレタ 「一九四一年才昭和十六 十二月六日一宮地（音譯）」
日誌	隊名不明	
日誌	南海派遣隊	
日誌	陸戰隊、吉本 隊	
日誌	海軍第一特別 隊	
日誌	パラオ第三防備 隊	
日誌	步兵第一四四 聯隊	
日誌	步兵第一四四 聯隊	
日誌	隊名不明	

一九四一年  
昭和十六年  
十二月 七日

情報	日誌	日誌
田中分遣隊	艦名不詳ノ 艦乗組二等 水兵	佐世保第五海軍 特別陸戰隊
第三小隊、大福丸（音聲船中ニテ。イマ、島上陸攻撃ニ關スル、小隊命令一、上陸地點ニ於ケル敵情、並ニ地形、前ニ示シタ通り。當中隊ハ大陰ノ左第一線。田中分遣隊ハ一七・〇〇時、馬公カラ出航。	「艦長ハ勅諭ヲ奉讀シ、十二月八日、〇〇、〇〇時、行動ヲ開始スル旨ヲ表シタ。」	「十二月七日、（「サマカラ」）「カムラン灣」ニ向ヒ出發。艦長ハ、英米・國ニ對スル宣戰布告ノコトヲ話シタ。全員皆歡喜シタ。遂ニ朝復ノ秋ガ來タノダ。」



附表B-1 眞珠灣攻撃ニ關スル質問書ニ對スル回答

一、一四一五一一六一六一六二〇四八項（以上情報關係）ハ別途調査中ニツキ回答後送ス。

二、二九項（令達關係）ハ總テ寫ヲ降伏時、燒却シ利用シ得ベキ文書ナキニツキ關係者ノ記憶竝ニ斷片的資料ニ基キ、詳報ヲ記述中ナルニ付回答遲延ス。（註、以下一三三四項ハ當時軍令部作戰課長海軍大佐、富岡定俊、軍令部作戰課員海軍中佐、三代辰吉、聯合艦隊參謀海軍大佐、黒島龜人、海軍中佐、渡邊安次ノ記憶ニ依ル）

一問、眞珠灣奇襲ヲ企テ、提案シタノハ誰カ

答、當時聯合艦隊司令長官海軍大將、山本五十六

二問、右時期ハ

答、一九四一年一月上旬。（山本司令長官ハ當時

ノ第十一航空艦隊參謀長海軍少將、大西瀧次郎ニ對シ右作戰ノ考究ヲ命ズ）

三問、該行動ハ（若クハ對米戰豫想下ノ類似行動）

日本ノ戰前計劃ニ含レ居リシヤ

答、否

四問、若シ然リトセバ戰前計劃ニ示サレアリシ事項

ヲ記セ

答、記事ナシ

(註、以下五六七項ハ當時軍令部總長海軍大將、永野修身ノ記憶ニ依ル)

五問、眞珠灣攻撃實施ヲ決定セル時機ハ

答、一九四一年十一月三日。山本聯合艦隊司令長官上京ノ際、永野軍令部總長之ヲ裁決ス

六問、右決定ヲ爲シタル者ハ

答、永野軍令部總長

七問、若シ右決定ガ會議ニ於テ爲サレタル場合ハ該會議ノ時期及全出席者氏名

答、會議ニ非ズ

(註、以下ハ六一〇一―一ニ項ハ當時軍令部作戰課長海軍大佐、富岡定俊、軍令部作戰課員海軍中佐、三代辰吉、聯合艦隊參謀海軍大佐、黒島龜人、海軍中佐、渡邊安次ノ記憶ニ依ル。

八問、該決定ニ至ルニ當リ考慮セラレタル重要要素如何。

答、考慮シタ事ハ即チ

(1) 南方作戰(菲島ヲ含ム)ニ對スル行動ノ自由ヲ確保シ且時間的餘裕ヲ得ル爲合衆國太平洋艦隊ヲ無力化シ併セテ、(2) 我委任統治

諸島ノ防衛ヲ期スルコト

九問、實施計劃ノ細目ヲ立案セル者ハ

答、軍令部作戰課員、聯合艦隊作戰參謀並ニ第一航空艦隊作戰參謀

一〇問、右ノ目論見ニ着手セル時期ハ

答、一九四一年九月上旬

二問、該計劃案ノ完成時期ニ於ケル其ノ最終承認者ハ

答、山本聯合艦隊司令長官

三問、該計劃案ノ最後の承認時期如何

答、一九四一年（昭和十六年）十二月一日

一四問、本計劃ヲ承認セシ人員及機關如何

（註、本同答ハ當時軍令部總長海軍大將、永野修身、軍令部作戰課長海軍大佐、富岡定俊、軍令部作戰課員海軍中佐、三代辰吉ノ記憶ニ依ル）

海軍關係ニ於テハ左ノ通

（一）完全ナル計畫ヲ事前ニ承知セシモノ

軍令部總長

軍令部次長

軍令部作戰課長

軍令部作戰課々員

聯合艦隊及第一航空艦隊司令部ノ各司令長官

參謀長及參謀ノ大部

（二）計畫ノ一部ヲ事前ニ承知シセシ者

軍令部第一、二、三、四課長

海軍大臣

海軍次官

海軍省軍務局長

軍務局第一、第二課長及同課員ノ一部

聯合艦隊各艦隊司令長官

參謀長及參謀ノ一部

(三) 計畫ノ大綱ヲ事前ニ承知セシ者

天皇(天皇ハ米國政府ニ對シ最後通牒ヲ交付セル後機動部隊ヲ以テ合衆國太平洋艦隊主力ヲ攻撃スベキ旨ヲ承知シ給ヘリ)

(註、海軍關係以外ノ者ニ付テハ不詳ナリ但シ野村大使、來栖大使、駐米陸海軍大使館附武官及ホノルル駐在帝國領事ヲ含ム在合衆國本土及其ノ屬領ニ在リタル凡テノ日本官憲ハ本計畫ヲ事前ニ何等承知シ居ラザリシコトハ確實ナリ)

(註、以下二十一、二十二、二十三項ノ回答ハ當時軍令部作戰課長海軍大佐、富岡定俊、軍令部作戰課員海軍中佐、三代辰吉、聯合艦隊參謀海軍大佐、黒島龜人、海軍中佐、渡邊安次、赤城ノ飛行長海軍中佐、淵田美津雄ノ記憶ニ依ル)